
魔法封絶 マギステル

Croissant

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法封絶 マギステル

【Nコード】

N0519W

【作者名】

C r o i s s a n t

【あらすじ】

学園内に突如出現した鬼。駆け付けた魔法教師 高畑によって瞬殺されたが、犠牲者が出てしまった。

何とか命を取り留めた少女の名は八神はやて。

この世界にいるはずがない少女の出現がおぞましい戦いの幕開けだと、まだ誰も気付けはしなかった。

序章 ・ 第零項目 ・ (前書き)

色々あって、筆休めに書いたっす。

ちょっとだけ はやてで進みます。主人公の登場はちょっと先っす。

コレちゃうやんっ とか、色々とおありでしょうが、お許しください。

欠点は、亀更新になる事。ouchっ

序章 - 第零項目 -

——守り切れなかった!!

何故こんな事が起きたのかと首を傾げるより前に、巻き込まれた少女を救えなかった事が彼を責め苛んでいる。

知人であり大恩人の一人息子が魔法学校に入って早数年。
やや影を背負いながらもその溢れんばかりの才能を発揮し、早くも天才の様相を見せ始めていた。

その集中力は半端では無く、今回の出張でも学校を訪れていたのだが、魔法書らしき本を一生懸命読んでいたので会わずに陰からこっそりと見守っていた。

目を見張ったのはその基本の反復と集中力。これもやはり血筋かなと溜息が出たほど。

破天荒という言葉を実現した父親より、生真面目でパワフルなあの女性の面影を強く感じて少し悲しくなったが、それでもまっすぐに進み続けている様には少し感動してしまった。

そんな事で目が熱くなるのは年かもしれないなあ…等と苦笑していたそんな何時もの平和なある日。

再来年には卒業する事であるし、どんな人生を歩んでくれるものやら……

そう親しい教師仲間らと教育について話し合い、談笑し、珍しくアルコールを入れて気分良く部屋に戻ろうとした矢先……

突如、学園内に禍々しい気配が発生した。

万全のセキュリティがある筈だった。

そして万が一の侵入者に備えて警備の人間が割かれていたはずだった。

にもかかわらず、それはそこに……

世界樹広場のど真ん中に出現したのである。

突如現れたそれ。

この世にあつてはならぬ異形のモノ。

異界に身を置く隠れ潜むモノ。

穩という字から語が生まれたというモノ。

——鬼。

それも身体から放たれている瘴気からして邪鬼だ。

更にそれは、式鬼として完全に現界しているという厄介極らない奴だった。

しかし夜の学園にそれが現れた事も驚いたのだが、それより何より彼を驚かせたのは、駆け付けたその場に一般人が紛れ込んでいた事だ。

これは召喚した者が結界を張らなかったか、こちら側が結界を張る暇もなかった事が原因であろうが、それでも一般人……恐らく年恰好からして少女だろう……が巻き込まれた事実は変えようもない。

出現した際にわりと早く駆け付けられたのは幸いだったが、その人影が窮地であるという事に変わりはなく、彼は普段は掛けているリミッターを外してその異形を討たんとした。

が、アルコールが入っていた為か、或いは元から間に合わなかったのか、そう彼が反応するより早く手に持った棍棒がその小さな身体を横殴りに……打った。

確かに邪鬼ではあるし、一般人にとっては抗う術もない脅威であるが、大戦を知る高畑から言えば雑魚以外の何物でもなく、彼の知る英雄達にはまだ届かない彼でも、それこそ食事のついでの片手間で勝てる程度だ。

一般の術者でも油断さえしなければそんなに苦勞せずとも勝てるだろう。

だがそれは戦える者から言えば……の話であり、一般人からすればその攻撃速度も風のように速く、十分以上に脅威なのだ。

僅か一瞬の隙間で彼は届かない。

あっ！？　と思つた時にはその少女の身体は宙を舞い、街路樹をへし折つてすつ飛んでいた。

鬼の膂力からいえば、子供の身体なんぞ木の葉のようなものなのだから。

「キサマツツ！！！！」

激昂。

次いで空気が爆ぜるような轟音。

直後、その鬼の頭部は木っ端微塵に碎け散り、突き抜けた衝撃で持つて上半身すら消し飛んだ。

正に瞬殺。

NGOはおろか裏の世界でもその人と知られた彼の實力から言え
ば、この程度の鬼など雑魚に過ぎないのだらう。

だが……あの一瞬の遅れはあまりに大きかった。

「く……ッツー！！」

溢れ出る悔しさに、奥歯が碎けるほど強く歯を食いしばって肩を震わせる。

前もこんな不手際で大切な人を死なせた。
もうそんな事が無いよう、ただ彼女を連れて逃げる事しか出来ないような無力感を味あわないよう、この十年必死に鍛えてきたというのにこの様だ。

酒が入っているとかいけないとかではない。

僅か一瞬の隙が、一瞬の遅れが、

絶対にあつてはならないその遅れをまた作ってしまったのだ。

きつく握り締めた拳から血が滴り落ち、彼の悔しさを語っている。どれほどの過去があつたのかは不明であるが、それを見るだけで何となく伝わってくる気がする程に。

男は肩を落としてつつ念の回線を詰め所に繋ぐ。

——（事件は一応沈静。ただ出現した理由は不明。鑑識を頼む）

簡素で素っ気無い念話からも遣る瀬無さが解る。

だが、向こうは理由なんぞ知る由もなく、被害状況を教えろという返答をよこして来た。

——（現状被害は軽微。しかし一般人が犠牲に……）

「……」
「ふっ」

瞬間――

男はその小さな咳にカツと目を見開き、慌てて少女に駆け寄った。

首筋に手を触れ、脈を測ると……あるっ!!???

確実に脊髄を破壊されたであろう一撃を喰らい、音からしてアバラも粉々に砕けている筈。

直後に見た彼女は間違いなく息が止まっていた。

だが、今は……生きている——！！！！

——（要救護者一名あり！！ かなりの重傷だがまだ生きてる！
救護員、急いでくれ！！！！）

早く！！ 早く！！ と念をマシンガンの様に送って救護班を急
かしまくって呼び出す男。

その間にも少女の命は潰えてしまいかもしれないのだから。

何時も冷静な彼にしては珍しく係の者を叱咤しまくっている彼で
あるが、冷静さを欠いていた所為だろう、ある事に気付いていな
かった。

件の少女が、彼の様子を窺いつつ患部に手を触れて怪我を僅かに
癒し続けていた事に——

序幕

- 第零項目 -

白い壁、白い天井。白いカーテン。

何もかも白い部屋で、やはり白いシーツが掛けられたベッドが置いてあり、その横にはこれだけが灰色の機械が電子を音を立てていた。

その機械からはコードが延びており、それがベッドに横たわっている少女に繋がれていてその体調を伝えている。

規則的な電子音から安定している事を告げているのだが、予断は許されない。

何せ彼女はつい数時間前には死の淵にいたのだから。

そんな少女の様子を部屋の鏡の反対側から見守っていた白衣の男が、ようやくホッと表情を崩す。

「もう大丈夫です。峠は越しました」

「そう、ですか……良かった……」

医師にそう太鼓判を押して貰え、男も身体を脱力させて大きな安堵の溜息を吐いた。

「確かに重体ではありませんでしたが、意外なほど魔法が効いてくれました。」

まあ、報告されていた程ではなかった事も大きいんですがね」

そう冗談めかして白衣の男…医師が言うと、男はお恥ずかしいと頭を掻く。

焦っていたからか、失態に我を失っていたからか、どうも診断間違いをしていたようなのだ。

尤も、一刻を争う状態であつた事に変わりはないが。

それを誤魔化すように男は懷からタバコを取り出して啜えようとするのだが、施設内が禁煙である事を思い出し、啜えていたものをどうしようかと弄ぶ。

医師も愛煙家なのだろう、そんな彼を見て喫煙室に案内しますよと笑顔で彼を促していた。

安心した今だからこそんなやり取りが行える訳だが、二人とも一時は本当に顔色が悪かった。

大戦が終わってからこつち、この地で魔法被害というものは無か

ったのだが、この少女がその久方ぶりの被害者になるところだったのだから。

二人とも魔法関係者であり、大戦を経験しているからこそ、あのような惨劇は二度と見たくなかった。

全てが終わったというのに、被害者だけが増えて行く。

大雑把に言えば政治的な無様さの所為で積って行く被害であり、それを隠そうとする所為で余計に傷口が広がっていった。

結果的にある女王が悪の背負う事によって少しだけ救われたのであるが……その傷痕は未だに醜く残っている。

尚且つ被害者は一般生徒。

あの大戦時にも出なかった表への直接被害を出してしまうところだったのだ。

だからこそその二人の安堵であり、だからこそその笑顔だった。

兎も角、何時までも紙巻きを指に挟んだままにしていたって湿気るだけなので、男は大人しく医師の好意を受けてドアに手を掛けた。

「後はもう少し落ち着かせてから一般病棟に移すだけですな。事情聴取は目覚めるの待ってからで良いのでしょうか？」

「ええ。」

彼女には僅かばかり魔力がありますが魔法が使える程はありませんし、ウラも取れてます。

名前は八神はやて。今年から当学園の女子中等部に通う事になった新入生です。

交通事故で家と両親を失い、児童福祉施設の伝手でこちらの方に来たとの事です。

もちろんその施設ですがそちらも調査済み。

麻帆良のOGがいるというだけで裏には縁もゆかりもない所でしたからこの件には無関係でしょう」

「成程……」

しかしそれはまた……」

何と運の無い少女であろうか。

家と家族を失い、生きる為にこちらに越して来てまた災難に遭ったのだ。

その上も今回は裏の事件。

犯人の確保はおろか特定すらできておらず、尚且つ仮に特定できたとしても責任を取らせる以前に、表立っての謝罪すら出来ないときている。

だったら……

だったら尚更責任を取らねばならない。こちらのミスでの被害であるし、魔法使いの不注意と愚かさが招いた惨事なのだから。

巻き込まれた彼女が一般人だと言うのなら、間違いなく自分らの不手際なのだから。

そう心に決めつつ医師に付いて行き、大きな音をたてないようにゆっくりと部屋のドアを閉めた。

「それで召喚者はまだ……？」

「ええ……実は何者かが仕掛けていた呪式が魔力を溜めて勝手に起動した可能性も……」

「成程。ポイントに仕掛けて魔力が溜まったら自動起動という事ですか。」

「明らかな無差別テロですね。何と卑劣な……」

怪我人がどうにかなったので、この二人も何時までも付いている暇は無いのだ。

彼らにはやらねばならない仕事があり、これ以上は個人的感情だけでそれから離れている訳にはいかない。

守らねばならない、救わねばならない者は彼女だけではないのだから。

それこそが学園や世の平和の一端を担っているのだから……

——だが、関係者ばかりの施設なので気が弛んでいるのはしょうがないが、それでも迂闊にも程がある。

遠ざかってゆく足音も何時しか部屋の中に聞こえなくなった頃、

『うーん……魔法が世界に浸透しとるとは……なあ』

パチリと少女の片目が開き、その目だけがグリグリ動いて自分の状況を確認し始めた。

しかし彼女のそばにある機械はピッピッと規則的な電子音を発しており、少女の意識がまだ戻っていない事を告げている。

にも拘らず、彼女の片方の瞼は開いており、顔に付けられている呼吸器の隙間から周囲の様子を窺っていた。

そのブラウンの瞳には理性の光があり、周囲の環境を注意深く観察し、判断し、解析が続けている。

それは男たちが知る年代の少女のそれを大きく超えていた。

『文明レベルは同じくらいかそれ以上。』

せやけど魔法が世界に浸透してはおるんやけど……殆ど“新参者”。

良くても“理解者”程度……か』

先程の才二を倒した手並みは成程見事であつたし、世界に満ちている魔力の使い方も、この施設の様相から見たその発展性も、アイツら程ではないにせよ大したものだと感心できるレベルであるが……如何せん燃費の悪さは同程度に酷過ぎる。

はつきり言つて魔素すら必要としない程度のもので、もやたら消費しているし、もし先程戦つた彼が実力者だというのなら、この世界での魔素消費量は彼女の数百から数千倍だ。

幾ら自分らと差があるだろうとはいえ、コレは酷いにも程がある。

『ヤレヤレや……
でも、まあ……ある意味好都合やな』

少女が人差し指を僅かに動かすと、掌サイズの人の形をした何か……水色の長い髪を持った人形のような少女が出現した。

指先をピクリと動かすだけの指示を送ると、その少女人形はコクリと頷いてベッドから飛び降り、駆け出していく。
途中、病室の壁もあつたのだがそれをすり抜けて……

『案の定、結界をすり抜けても警報は鳴らへん……か。
ホンマに何から何まで違うみたいやな』

その事に若干の寂しさを感じない訳ではないが、その感傷は殆ど無い。

二度と帰れないと解つてて来たのだから。

『兎も角、怪我治そ。
自然治癒のレベルで……』

どうせ先の予定は立っていないのだ。

行き当たりばったり感が否めないが、それでも世界の壁の所為でどうしようもなかったのだ。

尤も、先生が直情的に行動してしまう部分もあるし、それについ

て行くのだから彼女も大概そうだったりする。

それに二人して計画を組んでいたとしてもまともに動けたかどうかは不明であるし。

少女は――

いや、少女の姿をした何かはそのまま目を瞑り、意識を本当に落とした。

何せ怪我をしたのも本当であるし、重篤だったのも本当だ。
単に死なないようにしただけなのだから。

そして彼女は一時の休息に入る。

足場を固め、本拠地を作っておかねばならないのだから。

この地を舞台にして おぞましい戦いの幕が開いてしまつかもし
れないのだから――

第壹頁 平穩なるかな

ズシン…とか、ドカン…といった凄まじい地響きが街を揺るがしていた。

正に爆弾が連続で爆発している時のそれ。

或いは爆撃が行われている時のそれで、その場所から離れているところでは当然ながら何が起きているのか解らない為、市民達が不安そうな顔で遠目で様子を窺っている。

だが、中心地の驚愕はそれどころではない。

と言っても、何かしらの事故の中心域であるから……ではなく、起こっている事件そのものが驚天動地なのだ。

この爆音、振動、衝撃。それには全て何かしらの爆発物やらが起こしたのではない。

その現場で起こっている事は、たった二人の人間が戦っているだけなのだ。

恐るべき事というか信じ難い事というか、その物騒過ぎるにも程がある“喧嘩”の余波が、爆発やら衝撃やらを発生させていたのである。

成程。確かにそれは現場近くにいる人間は驚いた事だろう。

——いや？

決してそれだけの話では無い。

都心部のど真ん中で、周囲の状況に脇目も振らず殴り合いをしていたのは確かに人の形をしていたし、大小の違いあれ人間サイズではあるのだが放っている力は人のそれではなかった。

少なくとも人間が持てる火力ではない。

一殴りでビルから打ち壊せる程の破壊力。

それを放てる事も異様であるし、連続で放てる事は更に異様だ。

そんな非常識な火力でもって攻撃をし続けているのは、一人の男。

正に筋肉、と形容しても良いほど逞しい身体をし、他を圧倒……どころか近寄る事すらできないパワーでもって一人の人間を攻撃し続けていたのである。

だが、そんな事に、その程度の事に驚いている訳ではない。

何せその褐色の肌の男、『千の刃』やらの異名を持つ有名な男で、その無茶振りはこの国どころか他国にまで知れ渡っており、この男

だったらコレくらいは出来ると誰もが納得するだろう実力者なのだ。

そんなバグキャラとまで言われていた男が、

大戦の英雄としても、史上最強の剣闘士としても世間に名を知られていた彼が、一人の若造…少年に圧倒されていたのだから――

ドガ…ッ と硬い音を立てて大きな何かが地面にめり込んだ。

ごうごうを火を噴く建物。崩れる高架道路。
ひっくり返っている何かしらの乗り物。

悲鳴、助けを呼ぶ声も上がっている。

そこはまるで戦地のど真ん中の様相を呈していた。

だが実際には、たった二人の人間が行っている戦闘だけでこの惨状が発生しているのだ。

「テ、テメエ……」

その周囲の火の熱にも負けないような灼熱の声がし、陥没した地面から一人の男が立ち上がってくる。

尤も、気炎は大したものだがその現状は敗北濃厚。

何故か怪我らしいものは見えないのだが、立ち上がりかねているのだ。

「何度も言うが……」

しかし相対している側の少年は怪我らしい怪我がない。多少いいのをもらってはいるが、ダメージに値するものは受けていないようだった。

「いきなり攻撃を仕掛けてきたのはそちらだろう？
僕には怨まれる筋合いは無いし、意味が解らないぞ」

無茶苦茶な理由で喧嘩を吹っ掛けてきた相手にすら、そう穏やかに返す余裕すらある。

その声音も相手を見下すものではなく、道を聞いてきた通行人に向けられる程度の親しみを感じるもので、更には決して装っている訳でもない。

少年は本心から極普通に話をしているだけなのである。

「うる……っせえつつっ！！！」

まるで最後の力を振り絞るように、男は一枚のカードを取り出すとそれに秘められた力を解放。

アデアット
——召喚——

千の武器を使いこなせると言われている男が持つアーティファクト。
ホ・ヘーローヌタ・キリゾウソーパーン
千の顔を持つ英雄。

あらゆる武器に変貌する、時と場所を選らびあらゆる状況下で万全を齎せる魔法具。

只でさえ反則な男の、更に反則なその力が解放されたのである。

空気が破裂するような音を立て、周囲の建物より巨大な影……戦艦すら叩き斬るといって斬艦剣。

その恐るべき巨剣が、何とその一人の少年に向けて振り下ろされたのだ。

「あのな……」

相手の意思の確認もせずに攻撃してきた拳句、勝手に逆ギレされても困るぞ」

だが少年はというと軽く眉を顰めた程度。

右の手指を伸ばして軽く振る。それだけだった。

本人のムチャクチャなパワーと、バグとまで謳われたマジックアイテムの力が放たれ、凄まじい衝撃が周囲を襲う。

その波動に負けた建物は砕け宙に舞い、何とか形が残っていた高架道路もへし折られ、もんどりうって倒れた。

もはや地域限定爆弾が使用されたと言われても納得してしまいかねないほど。

だが、その凄まじいの一言である攻撃も――

「な、ん……だとお……?!」

男の丸太のような腕に反して小枝のように細い少年の腕。
その腕の先である掌――

いや、その右手の人差し指の先に浮いている小さな光る魔法陣によって完全に停止させられていた。

そして尚且つ、少年は全くの無傷だ。

……いや？

少年に対して行ったその男の攻撃。

嗚呼、その攻撃が素手であれば良かったのに。

本来であれば男は剣を使わない方が強いとまで言われている様に、素手で殴っていた事だろう。

その少年の防御力が魔法防壁の硬さによるものだと判断したが故の過ち。

アーティファクトという魔法のモノに頼ってしまうという致命的なミスを犯していたのだ。

カウンター
— 返呪 —

それが魔法が……

確実に後手だったというのに、少年の魔法が先に発動したのだ。

男らが知る魔法と全く違う根源に至り、根源より得た理は根本か
こつわ

ら違つ。

何とその攻撃の主導権を奪われ、戦艦すら分断するその超大剣攻撃は少年が行つた事になつてしまつたのだ。

在り得ない結果。

起こり得ない事象。

自分で自分に全力の攻撃を放つた事になつてしまつた男は――

「ガ…ツツ!？」

何が起こつたか理解する余裕も無く、自分自身の攻撃力によって攻撃した方向とは逆方向に吹き飛ばされてしまった。

流石に小さな声を漏らしたのが限度。

というより、そんな反応が出来た事すら奇跡に近い。

爆発と称する他無い、自分自身の破壊力。

その理を歪こじまされ、ベクトルを変えられ、自分の剣を自分に向けて… 剣を下から振り下ろされたのである。

吹き飛ばされた男のその巨軀は大理石の柱をへし折って尚、威力

も速度も落とさず更に飛ぶ。

硬いビルの壁を挟り、その向こうの壁に叩きつけられ、そして更にその壁にめり込んだ。

しかし恐るべき事にそこまで被害を蒙っていながらも、男は人の形を残せている。

「く……があ……ッ」

あまつさえ生きているのだ。この男、やはり只者では無い。

少年は男の生存を確認するとホッとしたように肩の力を抜いた。

信じ難い事であるが、その所作で手加減していただろう事が解ってしまう。

「魔力が大きいのは解ったが、使い方が正しくない。

単なる水をどれだけ集めてもそれだけでは紅茶にはならないだろう？

要は君の魔力濃度は魔法に対して全く足りていない。その事を自覚するんだ。

そうすればもう一步前に進めるだろう」

そしてこれだけの惨状を起こした当人はまるで子供の失敗を注意する教師か父親のよう。

尚且つ、やはりその口調からして装っておらず、芯から思っている事を口に出しているだけなのだ。

それがまた男の神経を逆なですが、反論出来るだけの力が残っていない。

本当に全力で戦っていたのだから当然だろう。

尤も、少年はまだそんな事すら理解できていないのだが……

しばし男の様子を見ていた少年だったが、やがて ふっ…と小さく息を吐いてそれを終わらせた。

その所作は『もうこんな事してはいけないぞ？』と説教を打ち切る大人という感じにしか見えず、歴戦の勇者は完全に幼児扱い。

いや実際、この少年から言えば男は幼児のようなものなのだが……

兎も角、やっと落ち着けたからだろう、事ここに至ってようやく少年は周囲の惨状に気が付く余裕を得た。

「それにしても……」

しかしそれでもどこか他人事の態が見える。

自分の掌に目を落とし、そこに光を集めて崩壊した建物に投げつ

けてみた。

——瞬間。

その建物は周囲の風景と時を無視したかのようにいきなり元通りの形を取り戻す。

一瞬の間に、あれだけの惨状を曝していた建物は何事も無かったように、爆心地のご真ん中で無傷の姿を見せつけていたのだ。

「やはり負担が少ない……」

魔素の溜まり方が半端ではないな」

空に手を上げ、魔素を集めてみるがやはり簡単に集まってしまうた。

魔法というものが世界に浸透している所為で、おそらく理が相当緩いのだろう。

それが喜ばしい事なのか不幸なのかは少年には解らない。それに今は然程関係の無い話だ。

もつとはつきり言ってしまえば、少年にとつて魔力の増減は殆ど気になる話ではない。

元からそんなに消費しない魔法の使い方をしているのだし、何より世界に負担を掛けるつもりが無いのだ。

まあ、確かに早く溜まるのに越した事は無いし、何より世界に負

担を掛けずに魔素を溜められる事は確かにありがたいと言えるのだが……やはりどこか正しくない。

癖とはいえ、そんな事が気になってつい眉を顰めてしまう。

「あ……」

そんな少年の目が、唐突に見開かれた。

片眉を上げているのだから愉快な事ではなさそうであるのだが、それでも探していたものを見つけられた事に安堵しているようにも見える。

連想させられるのは、やれやれやっと見つけたぞ、という悪戯っ子を見つけた保父。

とてもではないが、あれだけの戦闘を行った直後には見えない。

そして肩を落とすのだが、今さっきのそれとは違って安堵による気が抜けたそれ。

何だかんだいっていても、ようやく探していたものを目付けられてホッとした。正にそういった感じなのだ。

「やれやれ……そこにいたのか」

少年の表情に小さく見えるのは笑顔。

やはりそれには誰かを想っている風に感じられ、口ほどは迷惑に思っていない事が窺い知れる。

「ったく……」

あのじゃじゃ馬はフラフラ出歩いて」

と、言の葉は悪いが本気で心配していた事が解るセリフを零しつつ、彼の目をずっとそこを見つめ続けていた。

それがどこなのかは不明であるが、地域だけは何とか特定ができる。

矛盾している様でいて、少年らにとってはこれが普通の空間把握。

今リアルタイムで見つめているモノがどこにいるのか、そしてその事をどうやって知ったのかも謎。

だがそれこそが少年にとっての魔法であり、常識なのだ。

明らかにこの世界の魔法と違う理ことわりの中に彼はいた。

だから、という訳でもなからうが彼の思考は既にここでの事から外れており、行った先での行動に向いている。

これだけ聞くとかなり無責任な気がしなくても無いが、件のじゃじゃ馬を先に確認せねば最悪、ここでの惨状すら凌駕する事態が起きかねないのだ。

よって慎重且つ丁寧に素早く行動に移らねばならない。

そして少年は やおら片手を振り上げ、自分とそこの間を見すえて空を斬った。

俗に言う、二本指刀。

陰陽術や密教でよく使われるものであるが、術の行使に行われる詠唱等も無しに彼は指刀を振り下ろしたのだ。

——直後、空間がぱっくりと裂けた。

傍で見えていれば空間を切ったように見えるかもしれない。
空間を切ってそこまでのゲートを作ったように見えるかもしれない。
い。

しかし実際に行われたそれは、

少年の魔法によって斬られたものは距離。

何と彼は、あんな僅かな動作によって求めていた場とここまでの距離を切断し、絶対的な距離をゼロとしたのである。

転移や空間移動とも違う技術。

自分らが使う魔法という奇跡より更に向こうの奇跡。
そんな怪異が行われたのであるが、残念ながら理解できる者はいない。

尤も、仮に目に出来たとしても、それを空間接合に近い術だと解ったとしても、それ以上の理解は得られず、如何なる方法で如何なる能力でもって行われたのか想像も出来ないだろう。

何せ魔力を感じない程、何気ない所作で行られたのだから……

「……ま、待ちやがれ……」

その背に、か細い声が掛けられた。

何とこの男、まだ意識があるだけでなく声を出せるだけの余力が残っていたのだ。

とは言ってもそれ以上の事は出来ず、口を動かせるのが限界。
予想以上であり、予想外のダメージによつてまだ指一本動かせないのであるが……それでもせめて一太刀という気合でもって意識を繋ぎ止めているのは感嘆する他無い。

尤も——少年の耳にはその声は届いていなかったのであるが……

ヴウ…ン と、虫の羽音のような音がしたと思った時には、その少年の身体はその裂け目の中に消え、そこにいたという痕跡を残さず消え去ってしまったのだ。

歴史に名を残す英雄の一人であり、最強の剣闘士である男を一蹴した少年。

下手をするとそんな男が眼前にいた事……いやさ、戦っていたという事柄すら終わった事として記憶から除外していたのかもしれない。

それ程の淡白さで少年はこの地から完全にいなくなったのだった。

「オ、オレなんざ眼中に無いつてか……」

くそ、くそっつ くつそおおおっつっつっ！……！！」

敗北という傷を、心に負った男と被害を残して――

● 第壹頁：平穩なるかな

コンコンつと小さなノックが聞こえ、老人は書類から頭を上げた。

「フム 入りたまえ」

そう許可をすると、失礼しますと声がしてドアが開く。

入ってきたのは青年期を越えた辺りだろう、若い男。

軽く眼鏡を鼻に乗せている顔が男のインテリ具合を見せ付けているのだが、どちらかというと力仕事の方が多い。

正確に言うと、前線で戦う才能の方がデスクワークより向いているというだけなのであるが。

「ただいま戻りました」

「ご苦労じゃったな。高畑君」

「いえ……」

帰還の挨拶を述べる男…高畑を老人がそう労わると、彼は社交儀礼程度にそれを受けた。

だが緊急出張による疲労より、心労の方が大きく高畑の顔色は冴えない。

老人もそれに気付いてはいるのだがあえて触れず、高畑が取り出した書類を受け取ってすぐさま目を通し始めた。

しばし流れるように読んでいたのであるが、ある一点から僅かに眉を顰め、引き込まれるように字を追いつける老人。

高畑もどこでそうなったか解るのか何も言わず、そんな老人をずっと見守り続けていた。

その間、響くのは時計の針の音のみ。
静寂が場を支配している。

そんなに多くは無いペーパーであるが、何度も読み返している所
為か、その内容の所為か時の流れが酷く遅いように感じさせられた。

「これは……真の事かの？」

咽喉が粘っているような声で老人が高畑に問う。

それだけの驚きがあつたのか、或いは内容に呆けて咽喉を枯らし
たのか水気が抜けているようだ。

高畑は僅かに肩を竦め、そばにあつた水差しからグラスに水を注
ぎ入れ、それを差し出しつつ『ハイ』と肯定して見せた。

「……ハイ。直接あの人から聞いてきました。

彼のアーティファクトを使用し、大戦時において多大な戦果を
挙げていた全力での斬艦剣。

それすら全く通用せず、完全に一方的だったと」

「ふうむ……」

大戦の英雄。

最強の剣闘士、ジャック・ラカン。

闘奴隷上がりの傭兵で、その強さは御伽噺と言ってよいほど外
れた程。

最強の魔法使いと云われていた『千の魔法を使うもの』に匹敵す
る実力の持ち主として広く知られ、今も帝国でそのパワフル過ぎる
戦いで闘技場のヒーローとして人気がある。

そんな彼が――

そんな超人の彼が街中でいきなり死闘を演じ、尚且つ一方的に滅多打ちにされて入院したというのだから、彼を知る者からすれば耳を疑うような事件だっただろう。

尚且つ相手はまだ若い少年だったという。
正しく信じ難い話だ。

彼を知る者の大半、というより帝国領の者達は相手が子供だったから思いつきり手を抜いてボコられたのだろうと確信しており、誰もが実力で負けたとは塵ほども思っていない。

「……じゃが現実には、しばらく動けんようになって……か」
「ハイ。恐ろしい事に肉体ダメージは殆ど無いんです。

自分のアーティファクトで斬られ、ビルに叩きつけられた拳句、埋まっていたというのかすり傷一つ無いんです。

ただしこれは彼のバグじみた体力のお陰……ではないようで、一区画が完全破壊されるような惨事だったにもかかわらず怪我らしい怪我をした者は無し。

瓦礫に埋まっていた人間も無事でした。つまり……」

「あえて怪我人が出ないようにそうやった……という事かの？」
「恐らく……」

意味が解らない。

戦った、というのならそれなり以上のリスクを負うはずだ。相手

があの男なら尚更である。

となると手加減するほどの余裕があり、周囲に被害が及ばないように戦ったという事か？

実のところ戦い…というか喧嘩を売ったのは件の男である。

しかし、戦わざるを得ないにしても、怪我人を出したくないというのなら移動して戦う筈だ。

にも拘らず、件の少年はそのままその場で戦いを始めて周囲の被害にも眉一つ動かさず男の攻撃を捌き続け翻弄し続けていたという。

その上――

「……正体不明、か……」

「……」

相手の正体が全く不明なのだ。

いや、それどころか何一つ情報が無い。

少年だった、という事柄以外の情報……それこそ大体の年齢や、髪長さや色、服に至るまで、現場で見えていた筈の者ですら全く記憶に残っていないのである。

「認識阻害？ いやそんなに派手に動いていたのなら幾らなんでも誰かは気付くじゃろうな。」

「というか彼も覚えておらんのじゃろう？　となると説明が付かん」

「ですね……」

何せ件の男は動物的な直感で行動する人間だ。

よく解らねえからぶん殴ってみた。という男なのである。だからこそ何かを感じて攻撃したのだろうが、それでもレジストし切れなかったか？

いや全力戦闘をやっている彼の魔力を防ぐなど夢物語に等しい。

それでも現実には一方的に倒されているのでどうとも言えないのだが……

「それで彼が入院した理由じゃが……これは本当の事なのかの？」

「……ハイ。信じ難い事です……」

「ふうむ……」

これまでもが本当だとすると……相手は容易ならざる存在という事じゃな」

「……」

全く怪我を負っていないにもかかわらず、ジャック・ラカンが魔法治療専門の機関に入院した理由――

肉体的な怪我はほとんど無いのであるが、彼は別のものが致命的

なダメージを負っていた。

つまり、彼の魔力そのもの。肉体ではなく、保持している魔力そのものがダメージを受けていて、それが回復できていない今は自力で立つ事も出来なくなっているからだ。

少年…であつた事以外の正体不明が全くの不明。

尚且つ大戦の英雄すら圧倒する力を持ち、それでいて魔法を使う際に魔力を感じなかったという異常性、

そして魔法使いが持つ魔力そのものにダメージ与えられるという恐るべき存在。

魔人……

そう称する者が出ているらしいが、正にしょうがない話だと言えよう。

魔法界でそれと名の知られている二人は見えない脅威に対して言い知れぬ恐怖を感じるのだった。

「むう センサー何しよるんやろ……
もお一年も経とるっちゅーのに」

「何やってんだ？ HR終わったぞ」

「ふえっ！？」

あ、ああ、千雨ちゃんか。何でもないわ、ちよう考え事しよっただけや」

「ふーん？ どーでもいいけどとつと部屋戻るぞ。
更新時間に間に合わねーからな」

「あり？ マジそんな時間なんか。

ほな、先いんどいて。私は晩御飯の買いモンしてから帰るさかい。

晩は何がええで？」

「なら洋食つぽいの頼む。

和食も良いんだが、何か今日は気分的にそっちが食いたい」

「Ok はやてちゃんにお任せや」

仲良く教室を出、駅まで仲良く並んで歩く二人。

伊達眼鏡をかけ、ひたすら地味に徹してはいるが、ネットアイドルとして売り出し中の少女——長谷川 千雨。

明るく社交的ではあるが、クラスメイトとの間に巧妙な距離を置いて積極的には関わらない、関西弁で話す少女——八神 はやて。

入寮時に色々ともめ事は起こったものの、はやてのその巧妙な距離の置き方と、千雨のパーソナルエリアに踏み込まず、そして趣味を茶化したりしない彼女に、何時の間にか二人の距離は縮まっていた。

絶妙な距離感が逆に歩み寄りを促したのだから皮肉なものである。

おまけに はやては千雨と意外なほど話が合った。

それは好みであったり、同じようにコンピューター関係が得意であったり、と色々あったのだが、何よりかにより、ここ——麻帆良学園都市という地の異様さに気が付いている事が挙げられる。

その不条理さに慌て、憤り、愚痴を言い合っている間にその距離がぐぐつと縮まり、今では連れだって歩いたり、一緒に買い物に出たりするほど気が置けない関係になっていた。

（ちゆうても、千雨ちゃんから言ったら私も不条理極らない存在なんやけどな……）

と、内心で溜息を吐く はやて。

この魔法使いの都市の中に紛れ込んでいる魔法使い。

魔法の定理やら法則やらを無視しまくるモノ。

魔力を使って魔法を起こす、世間の魔法使いと違い、

偶に文字通り魔法を使うモノ。それが彼女なのだ。

（普通の魔法使いが非常識やったら、私は何なんやらな？）

と、思わくない。

異端——等といったレベルではない。

いふなれば『別』。

別格、という段差どころではない。似ているのは名前だけで、全く違うものなのだ。

自分と……センサーは……

「おい」

「ひゃっ!？」

横合いから声をかけられ、びくつと驚いて跳ねてしまう はやて。

そのリアクションに呆れつつ、千雨は電車がホームに入った事を告げて一緒に乗り込んで行く。

「どうかしたのか？ 何かいつもりボケ具合がひどいぞ？」

「千雨ちゃんの評価がひどい件について」

「事実だろーが」

「むう 返す言葉もあらへんがな」

そう茶化そうとするが、やっぱりルームメイトの目は自分に向けられたまま。

折角の距離を広げるのは嫌だったので、無難な答で返す事にした。

「我らが担任様がしょっちゅう出張に行きまくってHRすらまともじゃない件」

「……言っな」

「もうすぐ二年生になるいうのに、進路提出考えなあかんこの時期に出張行かせまくる学校もナニやけど、

ホイホイ行く担任もナニ」

「言っなってば」

「PTAも何や言わへんし、

こんだけ人数あるし、ごつつ成績ええ子もおんのに進学コース

進むや言う子おらへん。

義務教育終わったら留年あんのに、皆ビリッケツでも平気」

「言うなつつってんだろ!？」

私だって必死こいて見て見ぬふりやってんだぞ!？」

「ゴメンゴメン」

誤魔化せはしたが無難とは程遠かった。はやて反省。

兎も角、機嫌が悪くなった千雨を宥めつつ、今晚は軽めのモンにして、デザートで機嫌とるかと策を練る。

ぷりぷり怒るルームメイトの太鼓持ちに徹しつつ、はやては車窓から見える風景に眼を向けた。

平和な学園風景。

一見、どこにでもあるような夕方に向かう風景であるが、よく目を凝らして見ると別モノが混じって見えている。

格闘系のクラブだろうか少年は手から何やら発射しているし、

雑技団も真っ青な空中アクションを行っている者もいる。

朝には車とほぼ同速度で走る生徒も見られるし、専門研究施設の技術を突破したような人型ロボット偶に走っている。

そして自分らのクラスには完全人型ロボが普通にいるし、何やら人とは明らかに違う生徒も混ざっている。

こんな混沌とした中で、そのズレに気付いてしまっているのだ。
この千雨は。ルームメイト

だからこそ――

「載つける画像の加工手伝うさかい、勘弁してつかあさい」

「バーロ　へたくそな方言で言われたら余計に腹が立つわ。
衣装作り手伝え。二着な」

「グハっつ　千雨ちゃん、光沢に拘るさかい縫うのんも一苦勞な
んやけど」

「知らん。自業自得だろが」

「ほんなん殺生やわあーっつ」

自分の様な眼に遭わせたくない。

自分を含めた周囲全てが騙され、

病院側も知っている筈なのに、半身が動かない状態で　あり得な
い孤独の生活を強いられ、

自分は這いずって生きるのだと思い込まされていた。

あり得ない物が見えているから口にすると、そう思う方がおかし
いと否定され、

歪んだ現実との間に壁を作らねば満足に学校すら行けなかった干雨。

異なっているようでいて、その実かなり自分らは似ていた。

大人たちに都合によって認識が歪められ、一人にされていたという事が――

だからこそ彼女を救う術を模索している。

自分の持つ魔法特性もあって、未だ救う術のない彼女であるが、絶対に見つけ出して見せる。

そう心に誓い、知識的に覚束ずとも彼女なりに研究し続けた。

しかし限界は見えてくる。

どれだけ破壊の力を持つが、どれだけ魔素を集められようが、知識の無さは如何ともし難いのだ。

だからこそ彼を想い、ずっと待ち望んでいる。

絶望を喰い破り、光を掴み取る力を自分に与えてくれた彼を……

彼女にとって、唯一無二の先生を――

「おい、聞いてんのか？」

「ふえっ!？」

……あ、うん聞いとるで？ マクドの照り焼きはやっぱ甘って好かんなー」

「違うわっ!!」

プレ用の壁紙の事だ!! 聞いて無かっただろ!？
罰として食券五枚だコノヤロー」

「ぎゃーすっつ

せ、せめて三枚にいゝっつ」

初めて得た、この友人の為に。

こんな楽しい掛け合いができる日々を守る為に。

例えそれが、薄氷のように脆い平和だとしても――

第壱頁 平穩なるかな（後書き）

お疲れ様です。

ごらんのように はやてがメイン。サブは……お解りつスねw？

登場がまだ先の主人公によって麻帆良は苦勞を背負いこみます。
言ってる事は確かに正論なんスけど、根元の角度が一度ズレたら
取り返しがつかないもんスよね？ そういうやつス。

亀更新決定の話スけど、長い目で見えてやってください。

ではまた……

第貳頁 湾曲に向かう歪曲（前書き）

こちらでも更新です。

筆休めに書いていたので遅い遅い。

この話は、主要の登場人物全員が精神異形です。
正しいと思って間違った行動を続けます。
ご注意ください。

一番の欠点は、主人公が登場してないし活躍してないし喋ってない事ww

第貳頁 灣曲に向かう歪曲

ざああああ……と大きな音を立てて上流特有の強い流れが水を運ぶ。

川幅は狭いが上流特有の急流さをみせているのは滝の直近くだからだろう。

その周辺は深い森に囲まれているのだが、何故か滝壺の周りは挟り取ったようにぽっかりと空間が開いており、そこにこれ幸いといわんばかりにテントが一つ擠えられていた。

場所が場所だけに大雨でも降れば非常に困った事となるだろうが、普段ならば水場の近くでもあるし、食用に適した魚もそこらを泳いでいるのだから、キャンプにはもってこいの空間であろう。

何せ風呂として使われていると思われるドラム缶まで置かれているのだ。

それを見ただけでもここでの快適さが感じられてくる。

偶に熊が出る事が問題だが、ここで定期的にテント生活をしている少女ならば熊なんぞどうとでもできるのでやはり問題は無い。いや、熊と戦えるという時点で問題なのかもしれないが。

—— 兎も角、

件の少女は週末となるとここを訪れ、そういつた野生動物と戦い、狩り、捕り、採集し、

それらを食べ、或いは何かしらの薬の材料としたり、でなければ木々と一体化して自然の氣を取り入れる等の修業を行っていた。

本人は完全否定しているのだが、その行為は修行者……それも忍のそれに酷似している。

というより、忍者装束を着ているのだからズバリそれそのものだ。しかしよくある“ごっこ”的なそれと違い、彼女のそれは本格的であり、本物なのである。

甲賀中忍――

甲賀では中忍が他の上忍に相当し、何より実践的な派の体質からして彼女は最上位の腕を持っている事となる。

それほどの彼女であるが、やはり修業を欠かす事は無い。怠りと侮りは越え難い難敵だと理解しているのだから……

そんな彼女が、ここ一年ほど観察を続けているものがある。

余りにも不自然であり、奇怪。そして現実的ではないもの。

見つけたのは本当に偶然であり、単にキャンプ地の選んだ土地の

直脇だったからに他ならない。

「……今日も変化は無し……でござるか……」

そう呟いた少女の目は一点を見据えたまま。

どうどうと音を立てて流れ落ちる滝。その滝壺に注がれている。

確かに、ややこじんまりと纏まり過ぎている感もあるが、自然の景観としては上のクラスであろうし心癒されるものがろう。

しかし彼女は景色を見ている訳ではない。

その景色の中に紛れ込んでいる不自然な物を観察しているのだ。

ここを訪れている間、ずっと彼女が気に掛けているもの――

余りに自然と調和しているが為、かえって不自然に感じ、そのお陰で見つけられてしまったもの――

それは、この滝壺の底に佇む一人の少年であった。

正確な年齢は不明であるが少年と青年の境くらい——まあ、若く見てしまうのも失礼かもしれないので青年と称そう。

兎も角、声すら聞いた事が無いのでその判断が正しいかどうかは微妙であるが、見た目からすると新大学生くらいの年齢であろうと思われる男性がそこにいるのだ。

着ているものは見慣れぬ制服で、紺の詰襟に濃紺のラインが走っており、昔の海軍のそれに似ている。

目を開けた事が無いので断言は出来ないが、ボタンではなくホック止めらしい制服を首元までピシッと留めている事から真面目な人間であろう。

そんな青年が、瞼を閉じて眠るように水底で佇んでいるのだ。

と言っても、この青年はただ水の中に佇んでいる訳ではない。

水中なのではっきりと解らなかったのだが、どうも見えない何かの中に入っていて、それに守られているようなのだ。

透明度が高すぎてよく解らなかったのであるが、水に潜って直接手で触れて調べてみると、その形は六面体の柱で、頂点は六角錐になっており、水底の凹みの形から底も六角錐。つまり一種異様に透明度の高い水晶の結晶のような形のものの中にすっぽりと入っていた。

そして、彼はその状態で生きている。

じつと見ていると、時折口の中から泡が出てくるので、呼吸も行なわれているらしい。

ただ眠っているだけなのか…というと、ちょっと違う気もする。

時たま魚が寄ってくるが、その魚は何故かその目に見えない水晶壁を素通りして青年に近寄って行き……消えてなくなるのだ。

単なる勘以外の何物でも無いのであるが、少女は彼がそうやって栄養を摂取していると感じていた。

以前、少女が試しに焼いた肉の塊を近付けてみたらやはり吸い込まれて消滅している。

その際、青年の氣が僅かではあるが増した事を感じ取ったのだ。

とは言ってもほんの僅か。氣の所為といわれても仕方が無いほどの微々たる程度である。

それ以来、少なくともものべ数十キロ分の食料を与えてはいるのだが、それでも増えた氣の量は精々自分の分身程度だ。まだまだ実体には程遠い。

如何なる術で持つて生きているのか不明であり、眠ったままで何を行なっているのかも不明。

無論、何者であるかも不明だ。

しかし妙に気になっている少女は、修業の合間に様子を窺い、食料を与え、時に語り掛けもしていた。

その綴じられた目がどんな眼差しを持っているのか、

そしてどんな声を発するのか、

目覚めた時を楽しみにして……

己では気付いているのだろうか？

その少女は、彼が何時か目覚めるといふ事を確信している事を。

そして、今の青年の氣の量からして、

その日は近いといふ事を――

● 第貳頁 湾曲に向かう歪曲

麻帆良学園という学校は、エスカレーター式なのでよっぽど成績が悪くなければ中等部から高等部に上がる事が出来る。

学校関係者からすると頭の痛い話であるが、エスカレーター式の学校なら頭がパーでも上がれると思い込んでいる生徒は結構多い。

これは麻帆良が個性を重視するタイプの教育方針をとっている事にも原因がある。

何せ進学に必要な最低点数がやたら低い為、生徒の多くが『バカでも進学できる』と思い込んでいるのだ。

エスカレーターといっても、上のカリキュラムについて行けないだろう成績不振者はそう簡単に進学できない。その現実を知っている生徒が少ないのである。

で、何故こんな事を言い出すのかというと……

「ありえん……」

0点なんぞマンガでしか見た事ねーぞ」

「名前書くだけでも5点はあるしなあ……」

「ほつといてよ!!」

クラスメイトの余りのおバカさん具合に^{呆れ}関心してしまったからだ。

先日行なわれた中間試験の返却があつたのだが、彼女の点数は何と0点。

全力で頭使つて白紙。

更にウツカリ自分の名前を書き忘れるという痛い過ぎるミスをかまし、見事奇跡の点数を獲得したのである。

「まあ、明日菜だし」

「明日菜やしなあ」

「アスナさんですしねえ……」

「ちよつとーっ!?!」

おまけに皆も納得を見せている。
つまり彼女なら取って当たり前前の点数だと認識されているのだ。

それでも見下すような人間がない事だけは救いだろう。

だが――

「……このままなら高等部も難しいし、大学部は不可能。
あいつ、就職はどーするつもりなんだ？」

「知らんわ。」

少なくとも不景気やし、中卒で成績があのままやったら就職は無理や思うで？」

「だよなあ……」

ギヤーギヤー騒いでいるクラスメイトを目の端にしつつ、二人は溜息を吐いていた。

何せ件のクラスメイト。テストの点が一桁なんぞ珍しくもないのだから。

教師らにしても、一部の者以外はしょうがない娘だなあ……という気楽さすら見える。何なんだと問いたい。実際には聞きたくも無いが。

「考えようによっては信頼だけど、やってる事は劣等生の切捨てにしか見えん。」

確か高畑が保護者だったな？ あいつ広域指導員のはずだろ？
何やってんだ？」

「私らのクラスが学年最下位でも気にしてへんヲッサンに何期待
しとん？」

「……常識を」

「言つてて痛あない？ 麻帆良^コやで？」

「だよなあ……」

ふう〜と溜息を吐きつつ突っ伏す千雨。

その吐く息で彼女の答案が飛ぶが、直にはやてがキャッチ。机の
中にしまつてやった。因みに84点である。

「学校来たらコレで、通学途中もアレ……
気晴らしに街に出ても麻帆良^コとのギャップが痛えし。
落ち着くのが寮の中だけつてのが……」

「ヒッキーへの道を着実に進んどるなあ」

「しみじみ言っなっ」

そついじけている千雨であるが、実のところ はやてという理解
者がいてくれているので途轍もなく助かっていた。

ややテンションは高いが、自分と同じような目線でいてくれるので溜まった物を吐き出す機会が多く取れ、ストレスの発散に役立ってくれている。

付き合いが良いというか何というか、はやてと同室になってからこっち、千雨はずっと地を出し続けられているので、クラスメイト達も『こういう奴』という位置に置いてくれていて大助かりなのだ。

でなければ、ストレスで潰れていたかもしれないほどのだから

「……まさか永久就職や狙うてないやろな？
明日菜って高畑に惚れとるみたいやし」

「勘弁してくれ。
一番ありそうで怖いんだ」

——時折、こういったありえそうな仮説をぶつたてて胃を痛くしてくれたりもするけど。

そんな二人の様子をじっと窺っている少女がいた。

正確に言えば“二人”をではなくその片方なのだが。

「どうした。まだ気になるのか？」

そんな彼女の声を掛けたのは、やはりクラスメイトである長身の少女。

ハーフなのかプロポーションのメリハリも中学生という範疇に納まりきっておらず、纏っている空気も同年代のそれでは無い。

「龍宮…か。」

お前はどっ思っ？」

そう問い返した少女…桜咲 刹那は、先に質問を投げかけてきた少女の方を見ようともしていない。

そんな刹那に苦笑しつつ、

「主語が抜けてるから返答に困るな」

長い黒髪と褐色の肌を持つその少女——龍宮 真名はそうやり返した。

尤も、冗談めいて返しはしたが、彼女も何を問われたのか気付かない訳ではない。

刹那の視線の先にいるクラスメイト 八神はやて。

彼女はずっと はやてを意識しているのである。

「気にし過ぎだと思っただけだね」

「ああ 高畑先生にもそう言われてる。

背後も既に洗われているし、普段の行動にも怪しい点はない。

多少魔力はあるが、基本的な魔法の行使も出来ない微々たるものだと……」

「関西弁なのも大阪圏出身だからなんだろう？

それに調査云々の時間があつたら趣味のネットサーフしているようだし。

早乙女よりややマシなマニア……というパーソナルしか浮かんでいないだが」

「……解っている。

解ってはいるんだが……」

「何か引つかかる……か？」

「ああ……」

そう小さく溜息を吐く刹那。

彼女自身、疑問を持ち続けている事に疲れているのかもしれないが、それでも守りたいものがある以上はそのエネルギーは使わざるを得ない。

その気持ちも解らんでもないし、相変わらず根っこがドライになり切れない不器用さにも好感が持てるのだが、やはり取り越し苦労な気がしてならない。

真名は魔眼という特殊な能力持ちである。

それは隠れたモノや、本当の姿を見抜いたりできる代物なのであるが、前に一度それを使って件の少女はやてを視た事があった。

確かに魔力はあったが、魔法教師が言っていたように希薄過ぎて使い物にならない。

仮に使えたとしても眠気覚ましとか、眠気を誘うとかいった低レベルなものだ。おまけに使用後はスッカラカンとなってしまう。

現にはやては、そういった学園の重要部分に近寄りもしない。

そして関係者に話を聞くなどといったアクションもない。

というより非常識な人間に近寄りたくないばかりに、千雨と二人してこちらから距離を置いているのだ。

特定の……

魔法関係者をピンポイントで避けているというだけで、特に変わった行動はしていない。

だから真名は然程気にしていないのである。

「まあ、それでも気になるというのなら、納得するまで調べれば良いさ。

その上で手が要り様なら声を掛けてくれ。格安で手を貸すよ」

「どうせなら無料で引き受けると言って欲しかったが……感謝する」

真名が離れて行った後も、刹那はまだ はやての背を見続けた。た。

確かに真名の言う事も解る。杞憂だと思っ。

しかし何故か気になる。

気になってしょうがない。

自分でも何でこんなに拘っているのか解らないくらい。

意味が解らないし、理由も何も無い。

だが刹那には何故かそう感じてならない。

八神 はやてという少女が、途轍もなく邪悪なモノであると――

「またや……」

それを感じ、はやては小さく溜息を吐いていた。

「んだよ。またなのか？」

彼女がの言葉を聞き、千雨も眉を顰める。

というのも、ここ一年ずっと発生している事柄だからだ。

理由は不明であるし、何かやったのかと問いかけようとすると視線を逸らして逃げられてしまう為、未だ何が理由なのか解っていないのであるが……

「……何時もの熱視線や」

「同情だけはしてやるよ」

ゲンナリするはやてに同情はするが、それ以上の事は何もやってやれない。

何せ相手はクラスメイトではあるものの、二人が係わり合いになりたくない人間の一人。桜咲 刹那なのだから。

理由はサッパリ不明なのであるが、この中等部に入ってからずっと彼女は はやてを観察し続けているのである。

「ややなあ……私、一応ノーマルのつもりなんやけどなあ……」

「桜咲って百合疑惑あるしなあ」

何せ件の刹那。普段はクールを貫いている少女なのだが、どういう訳か同じクラスの近衛 木乃香をずっと気に掛け続けているのだ。

木乃香本人が近寄っていてもそそくさと立ち去って距離を置くのであるが、その意識は常に彼女に向いており、その視線が自分から離れると途端に彼女の背中を追いつめる。

陰に日向にその動向を見つめているその様はストーカーのそれに

しか見えない。

木乃香本人と一定の距離を維持したままというのにも不気味さに拍車をかけている。

「アレで隠しとるつもりなんやから恐ろしわ」

「剣道部の幽霊部員だしな。

団体行動の運動部なのにほとんど部活にも出ず近衛を見てんだろ？」

「シャレにならねえな」

「それを注意せん部長とか顧問とかもええ加減どーにかしてほし
いんやけどな……」

彼女の同性愛説云々は兎も角として、そんなに実害がある訳ではないし、何より相手の逃げ足（？）が異様に早くて証拠が何一つ無いのだ。

と言つて、下手に学園サイドにこの事は伝える訳には行かない。

何せ今彼女らが述べているように、この学園は一部の生徒達の不審な点を隠したり守ったりしているのだから。

わざわざ藪を突付いて蛇を出す気は毛頭無いのである。

よって二人は今日も顔を見合わせ溜息を吐く。

言っても無駄だしなあ……と。

色んなものに気付いてしまいが故の弊害であった。

「茶々丸」

「ハイ。マスター」

「あの娘の事は何か解ったか？」

「いえ。前回の調査と同じで不審な点は見付かっておりません」

「そう……か」

「ただ……」

「うん？」

「ただ。彼女が良く口になっている家庭教師の先生という人物が

未だ特定できておりません。

聞いた範囲の特徴を全て調査情報に組み込んでも、接点を持つ範囲に該当者がありません。

ですから、一部では彼女の妄想の存在であると思われるようです」

「……それか？」

「-は？」

「それが鍵かもしれんな。

ただの勘でしかないのだが……

あの女。同族に近い臭いがするんだよ」

夜の帳が下り、陰で動くモノが活動を始め――

しかし学園内は結界に守られており、害意のある者は壁を超えてくる事も叶わず終わる。

それでも幾ら嚴重な備えがあろうと隙間が全く無い訳ではない。

猫の子一匹は入れる隙間も、或いは蟻の隙間も無く……という表現があるが、実のところそれでも全く隙が無い訳ではないのだから。

万全とはいえ人の作りしものに完全は無い。

――現に、陰気が溜まり易い鬼門の方からじくじくと外部から闇が押し入ろうとしていた。

ボツツ

しかし次の瞬間、その影は見えない拳に打ち壊され霧散してしま
う。

鬼ですら一瞬で打ち倒せる男の拳波だ。形も保てぬ影などマツチ
の燃えカス程度でしかない。

一応、念の為、と男は周囲を確認するがあれ以外の気配は無い。
隙間から吹き抜けた程度だったのだろう。

とはいえ、一々報告するのも面倒であるし、それによって呼び出
されるのは勘弁して欲しい。

だから男は……

異常なしという念話を送ってからそのまま家路に着いた。

見ていなし、言いもしない。それこそが安泰を得る方法だと言わ
んばかりに。

それがどれだけ間違っているか——その事にすら見て見ぬふりを

して。

じわり……と歪みは迫りつつあった。

第貳頁 灣曲に向かう歪曲（後書き）

スローリイでごめんなさい。

因みに刹那の勘も、エヴァの勘も間違ってます。
重ねて申します。

主要人物は精神異形です。

ついでに申しますと、はやての所為とある世界はドエライ被害
を被っている事でしょう。元々の『闇の書』による暴走より性質が
悪いです。

そこら辺は何れ。三足草鞋でごめんなさい。
ではまた……

第参頁 平和という歪（前書き）

色々あつて遅くなりました。

案の定、理数以外はボロボロです。
追試つて少し簡単でいいよね。

第参頁 平和という歪

皆が皆して呑気な生活を送っている麻帆良学園であるが、問題が全く無いという訳ではない。

いや、そもそも問題がないという事こそが問題なのだ。

常識的に見てしまつと問題ばかりが浮き出てくるこの街で、表だつた問題が出てこない。

それこそが問題であり、怪異なのだ。

そんな異常であり、些細な事に気付いてしまふ者は悲惨である。

何せ異様だと思ふ事そのものが異様なのだから……

「クソ……」

一人の少女が悪態を吐きつつ寮への道を歩いている。

見た目がそれなり以上の美少女である為、その口から穿き捨てるような悪態が出るとやたらと目立つ。

本人は隠しているつもりであるのだが、それなり以上の美少女であるという事実はそう簡単には隠し切れない。

例えば目立たないよう髪を三つ編みにして伊達眼鏡を掛けたりしていたとしてもだ。

地味に徹しているつもりでも、その所為で周囲から浮き、結果的に目立つ事になっているのだがそれには気付いていないらしい。

尤も、今の彼女は眼鏡を掛けていないし髪も下ろしているので元の良さが表立っているのだが。

「今日も厄日か…… チクショウめ」

齒軋りすら行なつて、顔を隠しつつ歩いているものだからやたらと目立っているのだが、やはり気付いていない。

何時もなら解ってくれるルームメイトが隣にいてくれるのでそんなに困る事は無いのであるが、今日に限ってそのルームメイトは側にいないのである。

と言つても、その彼女は寮に直帰しているだけであるが。

今 文句ばかり零している少女は、そのルームメイトと別行動をとって街に買い物に出ていたのである。

何時もは二人べつたりであつたのだが、いないとこれだけ不便になるとは思つても居なかつた。

誰の目にも判るほど仲が良く、

二人でいる事の方が多いという事もあってか、そんなベツタリな間柄を見ていた者達の間では何時の間にもやらズ疑惑なんかが立っていた。

無論、彼女にもルームメイトにも同性愛の趣味はないし、何よりそのルームメイトには惚れた相手がいる。

相方は噂話を気にするような人間では無いが、自分はそういった噂を立てられるのもそんな目で見られる事もストレスに直結してしまう。

だから偶には別行動をとってみようと思ったのが……どうもそれが拙かったらしい。

折角、メモリを買いに行ったというのに、目当ての店では運悪く売り切れ。

そのまま帰るのも何だか癪だったので、別の店を廻って何とか手に入れはしたのだが、良く考えてみると何時もの店より割高であったし、何よりネット通販の方が安かったりする。

何てこつたいと肩を落としてつつ電車に乗ると痴漢に遭い、齒を食いしばって次の駅まで耐えはしたものの気分は既にどん底に。

兎に角、次の駅着いてから電車から飛び出し陰に隠れ、痴漢らしき男が下車したのを確認してから、ドアが閉まるより前にその電車に飛び乗ってやり過ごした。

何とか麻帆良まで戻れたのは良いが、そんなこんな的心労でボロボロ。

気分どころか足取りにも気力が抜けてしまっていた。

そんな精神状態だったのが悪かったのか、後ろから出てきたむくつけき男どもに気付く事が出来ず、その集団にぶつかって転がされてしまう。

運が悪い事は重なるもので、転がされただけでも腹立たしいのに、眼鏡と買ったばかりのメモリを落としてしまい、更にその集団の誰かに踏み潰されてしまった。正しく踏んだり蹴ったりである。

流石の彼女も我慢の限界となり、文句を言って弁償してもらおうとしたのだが――

「「「古部長！！ 今日こそ勝たせてもらうぞ！！！」」」

「こんなトコまで来るなんてしつこいアル」

その謎のむくつけき男どもは、何故か駅にいた彼女のクラスメイ
トの中華娘相手にいきなり戦いを始めたのである。

忽ち起こる不条理バトル。

常識やら何やらを置き去りにしたライトノベルのような戦い。

大人のように身体の大きな人間が物理学を無視したように水平に
吹っ飛ぶ。

或いは独楽のように回転して飛ぶ。

摩擦なんか知ったこっちゃない言わんばかりに、地面を滑ってす

っ
飛ぶ。

小さな少女がどんどん大きな男どもを吹き飛ばして行く。

確かに技やら何かしらの理由はあるだろうが、それでも傍目には
体軀の差を物ともしない膂力を感じさせられてしまう。恰もマンガ
あたか
が何かの一コマのように。

しかし、フィクションの中なら兎も角、目の前で行なわれれば堪
ったものではない。

係わり合いになりたくない者からすれば傍迷惑以外の何物でもな
いのだから。

何せこの非常識な奴らときたら、周囲の事が眼中に無いのだ。

彼女にできる事と言えば、運を天に任せて巻き込まれないよう距
離をとる事だけ。

是が非でも近寄りたくないし、何より中心にいる少女が同じクラ
スにいるという事も勘弁してほしい現実だ。

何時も何時もこんな戦いを楽しむような馬鹿野郎どもと違って彼
女は常識人である。

眼鏡やメモリを壊された事は確かに悔しいし腹立たしいのだが、
どうせ謝罪を求めてもあんな乱暴者どもの事だ。本気で謝ってはく
れまいし、起こっている理由すら理解してもらえないとは思えない。

となると、弁償云々より近寄らない方が精神衛生上は楽という事
となってしまうのだ。

……
非常識には近寄らない。その事が何よりも賢明な手段なのだから

そう自分に無理矢理言い聞かせ、
それでもやはり拳をきつく握りしめ、悔し涙すら浮かべながらも
彼女はそれらに耐え、彼女は黙ってその場を立ち去った。

係わり合いになりたくない。

あんな奴らに近寄りたくない。という思いが心を埋め尽くしてい
たのだから。

それでも寮が近付いてくる連れ、非現実から遠ざかるに連れて悔
しさが増してゆく。

どうしてこうまで気付いてくれないのか。

どうしてこうまで皆は受け入れているのか。

いや、こんな異常を受け入れられるのか——と。

押し込むようにカードを入れて玄関を開けて中に駆け込んでゆく。

時間はそう遅くもないのに、どういう訳か人目が少なく、彼女を見咎める者もない。

それを良い事にズンズン靴音を立てて自分の部屋に向かってゆく。

一歩また一歩近寄る毎に涙が零れて行くのだが、それでも安堵してゆく自分も感じられる。

部屋にルームメイトがいてくれると解るからだ。

夕飯の用意をしてくれているのだろう美味しそうな香りが漂っており、それが教えてくれるのだ。

ああ……ここに居場所があるんだ。解ってくれる人がいるんだ。そう思うだけで気が弛み涙腺も弛んでくる。

鍵を開け、ノブを掴み、捻って開ける。

靴を脱ぐのももどかしく部屋に上がると、

「あ、おかえり……って、どないしたんや？ そないな顔して。何かあったんか？」

顔を見せただけで解ってくれるんだ。

あんな奴らと違うんだと、喜びを噛み締める。

そして――

「は、はやて、私、私はなあ……つつつ」

「兎に角、落ち着きいや。

はやてちゃんは逃げへんで」

そのまま子供の様に泣き付くだった。

自分を理解してくれる者がいる――

その事が常に救いになるとは限らない。

と言うのも、理解者がいてくれるからこそ、
理解者という逃げ道がいてくれるからこそ、そこに逃避する道を持ってしまうからだ。

特にこのルームメイトの少女は、彼女が何に傷付き、何を苦しんでいるのかまでも理解してくれている。

そして性質の悪い事にこの少女はただ彼女を救おうとしているだけ。

欠片の悪意も無く、ただ友達を支えてあげようとしているだけ。それだけなのだ。

だが、だからこそ救いになっていない。
彼女に理解を示しているからこそ、結果的に何の救いにもなっていないのだ。

この少女のような魔法使いと、この世界の魔法使いとの違いに、その存在定義がある。

この世界の魔法使いは、魔法を使って何かしらを成し得るので正しい魔法使いと悪い魔法使いという別け方ができるのだが、この少女のような魔法使いはそれとは根本から違う。

邪悪な事に使うか使わないかというだけで、力の質は邪法と何ら変わりがないのだ。

存在自体が外道であり、いてはいけないモノなのである。

よって、例えば本人のその気がなくとも人を容易く破滅に導いてしまふ。

現にその少女…八神 はやても、大切な友達である少女を守る為にその苦しみを受け止めて支えているのであるが、駆け戻ってきた少女…長谷川 千雨は、はやてという存在に心の拠り所を見つけており、周囲には見えない壁を作っている。

拠り所があるという事により、本来の流れよりずっと周りとの壁を厚くしてしまっており、クラスメイト達の接触に対するかわし方もまた巧くなってしまうていた。

そして拠り所というものは、いつ何時“依存”に変わってもおかしくないという危うさを含んでいる。

救われているからこそ、

理解してくれるているからこそ、

程よい距離で支えてくれるからこそ、

千雨という少女のそれは、依存へと傾きつつあった。

悪意を持たず周囲を破滅へと導くモノ。

魔法書という外道を所持し、それを使いこなせる彼女は既に外道に堕ちている。

如何に守る事、正しき事に使おうと、存在自体が邪悪なので一側面以外は何の救いにもならないのであるが……

その事に気付けるモノなど、この世界のどこにもいないのだ。

「まったく……面倒な……」

そんな麻帆良の駅前で、男が一人道路を蹴りつつそうボヤいていた。

時間にして夜の九時を回ったところなのであるが、普通の駅と違ってそんなに人通りが増えたりしないのは住む者に学生達やその関係者が多い為であろうか。

人影が少ない事もあり、男のそんな奇行も目立ちはない。

ただ、街のと真ん中で行なっているからか、街灯の灯りがクロスして影が四方に伸びて余計に物寂しく感じさせている。

この男——行動は不可解極まりないが、この学園都市の教師であり広域指導員だ。

尤も、そんな表の顔の他に魔法教師という裏の顔も持っており、この行為にも実は深い意味がある。

彼が行なっていたのは魔法事件の調査で、地味ではあるが重要な仕事である。

学園長であり、関東魔法協会の理事をやっている近衛近右衛門がこの学園最強の魔法使いとして知られているのだが、彼はそれに次いで強いとされている程の腕を持っている。

名を高畑「T」タカミチ。

とある理由で魔法詠唱ができず、『立派な魔法使い』になる事が出来ないとされてはいるが、魔法界でもその人と認められている実力者で、AA+という格付けすら持っている有名人である。

しかしそんな彼が掛かる事態に出張り、更に調査中に独り言で愚痴ているとは。

一体何があつたと言っのだろうか？

「ふふ…お前でもそんな顔を見せるのだな」

それが面白かったのだろう。背後から少女がそう声を掛けてきた。

「後ろから驚かせるなんて趣味が悪いよ？」

「ぬかせ。とつくに気配を察知していたくせに」

灯りの陰から現れ出でたのは二人の少女。

一人は長い緑の髪を風に靡^{なび}かせている表情の乏しい少女で、耳の辺りにバイザーのようなものが着いているのが印象深い。

いや、それよりもその手。関節が球体で繋がっているのだ。

彼女の名は絡繰 茶々丸。この麻帆良学園のロボット工学部で生まれた人型ロボットである。

といっても魔法技術と科学のハイブリッドで、超最先端技術の結晶体。

メンタル的なものも成長過程にあり、やがてかなりヒトのそれに近寄ってゆく事だろう。

何しろ彼女は既に、魔法使いの従者をやっているのだから。

「それで、この僕に何の用事なんだい？」

「随分と急かすな？ お前らしくもない。

くくく……いや、それだけ余裕が無いという事か？」

「放つといってくれよ。

余裕が無いのは事実だけど……」

そうまた愚痴りそうになる高畑を見、面白そうに口元を緩める少女。

それだけを見れば尊大で意地悪な少女だという印象しか持てないのであるが、こんな時間にこんな場所に来て尚且つ彼のような者と相対して余裕を失わないのだから只者ではない。

いやそれ以前に、少女の唇の隙間から白い牙が覗いている。

——そう。彼女はヒトではない。

普段はこの麻帆良という地に縛られてはいるが、彼女の正体は吸血鬼なのである。

彼女こそ茶々丸の主であり、真祖の吸血鬼。特殊な方法を用いねば完殺する事は叶わないという真正正銘の人外。バケモノエヴァンジェリンⅡ AⅡ KⅡ マクダウェルその人であった。

二つ名さえ持ち、裏の世界で高額の賞金すらかけられていた彼女であったが、とある理由によってこの地に封じられたまま十数年も中学生をさせられ続けている。

本来であれば最強と言える位置にいる存在であり、不老不死という事もあつてか誇り高い彼女だ。
当然ながらこのような辱めは屈辱であり苦痛。如何なる手段をとっても外に出ようとする筈である。

しかし、偶然なのか意図的なものかは不明であるが、二つの呪式が絡み合つて作用しており、力の大半を封じて肉体年齢である十歳程度の体力まで落とされている上、この学園都市から一步も外に出られないようにされている。

十把一絡げの魔法使いなら兎も角、今の彼女ではとてもじゃないがこの中堅以上の魔法使いには手も足も出ない。

でなければ、体調不良以外で学校を休む事も出来ず、中等部の卒業式の後でまた一年に戻るといふ牢獄のような生活を続けている筈が無いのだ。

そんな生活の中で腐っていた彼女であるが、何やら笑みを深めつつ高畑を眺めている。

「……楽しそうだね？ エヴァ……」

「楽しい……というか面白そう、だな。」

きな臭くなってきた中、お前らが右往左往している様が多々笑える」

「人事じゃないんだけどなあ……」

この麻帆良学園という土地は超巨大学園都市という事で世に知られているのであるが、その裏に魔法使いの拠点という側面を持っている。

< 関東魔法協会 > という組織があり、その名が示す通りに東日本での魔法協会中心的位置にあるのだ。

しかしながら、関東魔法協会というものがあるのだから西にもそんな組織はある事となる。

その名は < 関西呪術協会 >。

これまた名が示すように関西での拠点となる訳であるが……名前後ろについているものが呪術となっている。

要はこの組織、日本古来の陰陽道から派生している術師らの組織なのだ。

一般人が聞いた所で意味不明だろうが、東日本は魔法協会……つまり、西洋魔法使いの組織が主立っているのに、日本古来の術師協会は西日本に留まっている事となる。

これは、古くからの術師家系からすれば日本を半分乗っ取られているようなものである。

当然ながら不快に感じている者も少なくはなく、特に西側は只でさえ人手が足りないというのに過去に起こった魔法世界での戦いの際に人員を割かれた事もあって根深い恨みを持っている者もいた。

戦力確保と関西の弱体化という一石二鳥を狙ったものでは？と穿った考察をする者もまた少なくない。その事が関東に持っている感情を如実に表していると言ってよいだろう。

そんな状況の中、二つの協会に属さない個人の魔法使い達に不穏な動きがあるという報告が上がっていた。

日本のあちこちに散らばっているフリーの魔法使い達が一齐に身を潜め、その情報が全く入らなくなってしまったのである。

何名かのエージェントを調査に出しはしたのであるが、情報の欠片はおろか影すら見る事もできない有様。

当然ながら西との連携が必要となってくるのだが、掛かる状況ではまず特使を送って関係そのものを修復してから、という手順が必要となってくる。

しかし特使として送るのであればそれなり以上の者でないと話にならないし、かと言って高畑のような腕利きが行くと逆にネームバリューがあり過ぎて挑発行為ととられかねない。

魔法使いのレベルの上下に開きがあり過ぎるのが問題なのだが、今更どころする時間の術も無いし。

関係の修復を長期に見据え過ぎたツケがここで回ってきたと言う事なのだろう。

無論、こんな向こうの長はこちらに理解を示してはくれているのだが、全員が全員そうだという訳ではないのである。

先だつての戦で家族を失った者は特に……だ。

だからこそ調査も遅々として進まず高畑もただ手を拱こまねいているしかなく、更にいつ何時要請が掛るか分かったもんじやないという緊張の中に置かれ続けていたのである。

それは確かにボヤきたくもなろう。

「で？」

詠春個人にはとくに話を通してあるんだらう？ 何と云っていた？」

「ウチには不穏な動きは見られません。

こちらで討伐の任に出ている者が多く詳しい事は——この繰り

返しさ。

確かに怪しいと思わなくも無いけど、そう言われたら成る程と思わざるを得ないんだよ。

何しろ向こうは退魔が専門で、元々あちこちに出回っているからね」

「ふん 詠春がとち狂ったとか？」

「冗談でもそんな事言わないでくれよ。」

仮に、百歩譲って、何かの間違いでそうだとしても、慎重なあの人がこんな目立つやり方をする訳無いだろ？」

お前は疑っているのか信じているのかどっちだ？ と問いたくなつたが、エヴァはその言葉を飲み込んだ。

これ以上彼を虐めるのは可哀想…等と思ったのではなく、彼の心労のベクトルが気になったからである。

「……お前」

「うん？」

「面倒事が嫌なのは解るが……」

単に向こうに調べに行くのが面倒なだけではないのか？」

高畑は一瞬、へ？ という顔をして固まったが、直に何を言い出すんだよと怒ったように否定した。

先に述べたが彼のような実力者を出張らせれば、この事態をどう受け止めているのかという誤解を生みかねないし、示威行為とする者だって出てくる事だろう。

ただでさえ長の娘をこちらの学校に入れるという無茶をやっているのだ。

その上で更に無意味な深読みをされて、こんな微妙な時期に余計な軋轢を増やす事になったら目も当てられない。

だから学園長らとの協議の結果、義理を通す為に向こうの情報を待つ事になっているのだ。

折角、あの戦いが終わって平和を取り戻せたと言うのに、こんなつまらない事でまた争いを起こすなんて御免だよ。

そう溜息を吐きつつ言葉を吐き、懷から煙草を取り出す。

しかし力ラだった。

それを握り潰し、じゃあ今夜は僕が大通りから見回るから……と言いついて彼女達に背を見せる。

さつさと煙草を買って吸いたいというのもあるだろうが、足早に駅前広場を後にして自販機のある角の方へと去って行った。

エヴァはその背に何の言葉も掛けない。

言葉も掛けないが、まともな眼差しも送っていない。

その目にあるのは嘲りと落胆。

高畑という人物を見限る直前と言った風だ。

「茶々丸」

「はい マスター」

唐突に背後の従者に声を掛けるが、彼女は別段驚いた風もなく直に返事を返す。尤も、ロボットが驚くかどうかは不明であるが。

「ヤツがここに居た理由はやはりアレだと思うか？」

「はい。調べていた場所からしても、夕方の……」

夕方。

時間からしてつい数時間前であるが、この場所で争いがあった。

争い——とは言っても、この学園では間々ある事で然程気にするようなものではない。何せこの程度の騒動は日常茶飯事なのだから。

しかし、今回の一件には別の事が関わっていた。

「で？ あの人形は何を拾っていたのか解ったか？」

「- 申し訳ありません」

「……まあ、良い。」

兎も角、我らの与り知らぬ者どもがいる可能性がある訳だな？」

「- その可能性は捨てきれぬかと……」

真に偶然であつたのだが、エヴァはその時間ここにいたのだ。

部活動に出ていた事もあるが、茶々丸が帰りに買い出しを行うと言つので気紛れで付いて来ていたのである。

そして起こつた何時もの騒動。

馬鹿馬鹿しい事この上もないので、彼女らはそれからとつと離れて目的の買い物をして帰ろうとしていたのであるが……

ドンツツ！！ という爆音を聞いて思わず振り返つた。

二人して驚いたのは何も音だけではない。何せその音と共に魔力を感じたのだ。

茶々丸はその記憶能力から、エヴァはその勘と知覚力から魔法使いがいたのなら察知する事が出来る。

しかし、それが起こる直前……いや、爆発が起こった瞬間まで全く魔力を感じず、尚且つ途轍もなく微々たるレベルで発生していた。これには魔法のエキスパートであるエヴァの驚きを隠せなかった。
何しろ魔法サキタ・マジカの射手一本分程度…或いはそれ以下の魔力で、あれだけの爆発が起こっていたのだから。

兎も角、封印によって僅かしか使用できなくなっている魔力で視力を強化し、様子を窺ってみると何が起こったのか解らず呆然としている男どもとクラスメイトの少女が一人。

今の謎の爆発に吹き飛ばされたか、間抜けな恰好で茂みに頭から突っ込んで気絶している数人の男。そして――

『む……！？』

と目を見張ったのは、小さな人形。

いや、式かもしれないが、兎も角 水色の長い髪をした人形のよ
うな少女が何かを抱えて手を振り上げていたのである。

恐らくその少女人形が何かしらの魔法を使い、周囲の人間を吹き飛ばしたのだろう。

しかし、如何に力を抑えられているとはいえ、エヴァンジェリンという力ある魔法使いが実際に目で見ないと解らない程の存在力の無さと、魔力の希薄さはどういう事なのか？

あれほど確立した存在ならば、せめてもう少し『居る』と感じられた筈だ。流石に精霊を感じ取る力くらいは残っているのだし。

だが、そうであるにも拘らず直に見ないと感じられないとは……

フンっと言わんばかりに茂みに突っ込んだ者達に一瞥した後、唐突にハッとして身を竦ませる少女人形。

何だ？ と、その視線が向いた方向に目を向ければ駆けて来る魔法教師どもがいるではないか。

このままこの場にいれば余計な疑いを持たれかねない。

視線を戻した時には少女人形が姿を消していたこともあり、エヴァは茶々丸を促してその場を後にしたのであるが――

「やはりこのタイミングだから学園側も気を張っているようだな」

「しかし、あの人形は魔力パターンからして式ではありません。確かに余りに微力な魔力でしたが、魔力波形は精霊か従者のそれでした」

「だろうな。」

今思つにアレは精霊だったと思う。恐らく何者かの使い魔か何かだろう」

それは直に見た彼女らだからこそ解るもの。

数百年を生きたエヴァの見立てと、そんな主から与えられる情報を整理して推察する茶々丸だからこそ出せる答だ。

しかし学園にわざわざ忠告してやるのも癪であるし、何より面白く無い。

だからこそ放っておいたのであるが……

「思っていた以上に混乱が見られたな。

くくく……平和に酔いしれ、ボケていたツケか？」

墮落というものは特に平和の中でこそ起こる。

これが戦場であれば、最前線の者が敵の血と臓腑によって墮ちたりもする。

戦場という狂った場ではそういった事は間々あるものなのだ。

しかし安全な後方におり、そこから勝てだの死ねだのと口だけで動こうとはしない者、

或いは動こうという意志を持たない者もまた墮落するものなのだ。

平和とは得難いものであるが故に中毒になりやすく、中毒になれば腐り落ちてゆく。

エヴァは嫌と言うほどそんな人の業を思い知っているのである。

「高畑先生が判断に迷っておられるように見受けられました。あれもそうなのですか？」

そんな主を見、ふと気になったのだろうか、茶々丸は何気なくそう問うた。

余りに自然に問い掛けたものだから、エヴァも一瞬虚を突かれた様な顔をしたのだが、従者の成長を感じて口元を緩める。
が、直につまらなさそうな目に戻して、

「今ヤツが握り潰した煙草の銘柄は何だったか解るか？」

という問い返しでもって答えた。

話の前後が繋がっていないと感じはするが、主からの問い掛けなので記録を再生してそれに応じる。

「箱のカラーリングから判断しますと、Seven Mild
のライトかと……」

少なくとも高畑先生が何時も吸わ^{マルボロ}れていたモノではありません
ん」

唐突に意味が解らない問い掛けを行なうエヴァもエヴァであるが、
即答で堪える彼女も彼女だ。

無論、そんな疑問など持っていては主の従者などやっていられないのであるが。

兎も角、その言葉を返すとエヴァは鼻の先で笑った。

その主の様子に茶々丸は首を傾げる。

「良いか？ 茶々丸。良く聞け。

人間にとって大切なのは拘り^{こたわ}だ。

何かしらに対する拘りを持ってこそ、人はプライドを維持できるのだからな」

「- はあ……」

「まあ、今のお前は解らんかもしれないがな。

無意識かもしれないが、ヤツは色んな拘りを捨てかかっている」

既に夜の帳によって高畑の背はもう見えない。

今夜の様に月が出ていようと、明るさは時に視認の邪魔をする。

点在する街灯の灯りによって逆に闇が深くなり、灯りの外が見えなくなるからだ。

立派な魔法使いを目指す者が多いこの街で、その中にいて目指される立場にいる彼は、正しい者として行いが間違っていないとされてしまう。

だからこそ気付いていないのかもしれない。

行いの全てが間違っているとされた彼女だからこそ理解できたのかもしれない。

彼女こそ闇であり影であるのだから。

「茶々丸——」

「はい」

「覚えておくがいい。」

人はな、凶星を突かれた時に出る言い訳は長いんだよ」

シャツとカーテンを開けると外は真っ暗である。

無論、街灯や寮の窓々から零れる灯りもあるが、それがあからこそ逆に闇を深く感じてしまう。

はやてにしてみれば夜空を見て明日の天気を窺いたただけだったのだが、月は出ているのだが星が全く見えないので判断が付き辛い。

「ぬう……マイクロウェーブが来そうなくらいの夜空やけど、雲が無いのに星が見えん。

これやったら天気が曇りかも解らへんわ」

「月は出ているか、てか？ 天気予報じゃ曇りだって言ってるぞ」

「ネットで表示されとるだけやのに、『言っている』とはこれ如何に」

「揚げ足取んな」

どうにか落ち着いた千雨と一緒に、くはやてちゃん特製野菜カレーを食べ終えたのであるが、時間は九時を回ってしまっていた。

九時を過ぎてメシ食ったら太っちまうじゃねーか等と言いつつも美味しくいただいた二人であるが、色々と気持ちを吐き出してから食事を終えたという事もあってまったり感は大い。

それでも洗い物を済ませた　はやては既に朝食の仕込を行っており、パンにするかご飯にするかで悩んでいた。

明日の天気を予想しようと夜空を見ていたのは朝の洗濯をする為だ。

千雨がネットサーフに勤しんでいるというのに、何とも家庭的な少女である。まあ、家事をキツチリやる性分である事と、家事そのものが好きなので別に気にもならないのであるが。

「まんまダメ亭主とだめんズ女房みてーじゃねえか……」

「ん？　何か言った？」

「何でもねーよ。」

明日の運勢も悪そーだって思ったただけだ」

これじゃあレズ疑惑を受けてもしょうがねえやと気が付いて溜息が出る。

と言っても、ここ麻帆良という異常な土地にいる以上まともな男を見つける事などできる訳が無い。

確かにまだ異性に興味が無いという事もあるのだが、この土地にいる男ときたらツラが良い奴に限って非常識な事が出来やがる。

自分らの担任にしても、その歳にしてはやや老け顔ではあるもののツラは良い方なのであるが、しょっちゅう受け持ちのクラスをほっぽって出張に出かけやがるし、広域指導員という立場を利用してボコス力人を殴ってる。

無論、麻帆良内だけであるようだが、冷静に考えるとここは治外法権なのだろうかと思ってしまう。

武道とやらをやっている者にも線の細い二枚目が結構いるようなのだが、やはりどこか変なのだ。

クラスメイトの中華娘と遣り合っている者の中にも、何か良く解らないものを手から飛ばす奴もいたし、走り高跳びの選手だって飛べない高さまでジャンプして攻撃する奴までいた。

あんなアクションは格ゲーの中だけにしたいと切実に思う。

それによく考えてみると、いくらクラスメイトが武道家であるとはいえ、人通りの多い野外で他流試合だ。

どう言葉を取り繕っても中等部、大学部の腕に覚えのある男どもをかき集めての制裁行為である。

尚且つ路上で突然行なわれた殴り合い。暴力行為だ。

練習場やら試合会場でないところでのこついった行為が届出も無しに認められるはずか無いのである。

それを黙認する者がいるのも簡便であるが、何のペナルティも科さない学園サイドも簡便だ。

何しろ実害があったのだから。

それは確かに学校やら部活をやっている関係者等に物申せば弁償くらいしてくれるだろうが、そうすると自分から人外どもに接触を持ちに行く事となる。

幾ら眼鏡やメモリの金が惜しくとも、あんな連中と係わり合いを持ちたくない。

それが正直なところである。

考えれば考えるほど学園外との違いと、この学園内だけで使われている技術レベルの差や矛盾等に気付いて行ってしまう偏頭痛が止まらない。

しかしそれでも――

「何や千雨ちゃん。頭痛が痛いんか？」

「薬飲むか？ 今はキヤ。ジンしかあらへんけど」

「何で胃薬なんだよ」

「つーか、私らの常備薬って頭痛薬と胃薬やし」

「そ、それは否定できねーけど……」

「だから何で頭押さえてる時に胃薬を」

「どーせ胃がシクシクする事になるんやから、予防摂取という事で」

「字が違いっ！！」

こうやって同じ視線で世間を見てくれて、

苦しみを分かち合ってくれて、

バカやって返してくれる友達がいてくれるからこそ今までやってこられたのだ。

「ああ、せやせや。言い忘れとったけどメモリいらへん？

Konozamaで通販したら、間違うてノート用の買ってもとつたんよ」

「マジか！？」

……って、コレって私が買ったヤツと同じモンじゃねーか！？」

「ああ、それでか。

注文する時に千雨ちゃんと話しよったから、間違うて入力してもたんやなあ。

送り返すんも面倒やからどないしよーかと思とったトコやなんや。

もろうてくれたら私も助かるわ」

「いや、こちらとしてもありがたいんだけど……いいのか？」

「ええて。食費払う時にでも分割でもろたらええわ。

トイチや言えへんし」

「言われたら返せねーよ。

……だけど、ありがとな……」

「いえいえ」

時々、こうやって色々嬉しい事もしてくれる得難い友達。

そんな彼女がいてくれるからこそ、自分はやっていける。

だから千雨は――

はやてというトモダチがいなければ、ココで生きていく事も出来ないかもしれない。

――そう……思……っ……て……し……ま……っ……て……い……た……。

善意が全て人を救えるとは限らない。

例え少女の心を傷付けた者達を吹き飛ばし、壊された物を魔法で直したとしても、

そしてそれを間違って買ったものだからとプレゼントしたとしても、

結局はそういった事があったからと周囲への忌避感を強める材料になる事もあるのだから。

存在が邪悪という事は、そういう事なのである。

魔法使いというヒトとは違い過ぎるモノとなっているのだから。

異世界の魔法の毒は こうして、

させて行った――

ゆっくりと、ゆっくりと世界を爛れ

第参頁 平和という歪（後書き）

読んでいただきましてありがとうございます。

マギステルの方は読みやすさを研究しているので短めとなっております。です。ですので今回はここまで。

読んでいただいて『あれ？ これってアンチっぽくね？』という感想を持っていただけでは成功でございます。アンチではありません。あえてそう受け止めてしまうよう書いているのです。

そして大人たちの心は歪なカタチによってオカシクなっている次第。

この世界にとっては迷惑どこの騒ぎじゃありませんが。

そしてウチのはやては面倒見の良い。。。です。

因みに彼女が使っている精霊は外見“だけ”似て（似せて）ますが、リインじゃありません。というかそんな子いません。生まれてもいません。あしからず。

このままゆっくりと平和に腐らせてゆくのも良いかもしれませんが、そろそろ事件起こさないと主人公が寝たままですので、コトを起こすしますw

でも、次はミニステルだったりw

兎も角、次回に続きます。
ではまた〜

第肆頁 羽化（前書き）

遅くなりましたすみません。

べ、別ニXブラッド ニ ハマツ テテ更新忘レテタ訳ジャナイデ
スヨ？ ホントダヨ？

と、兎も角、こちらもしリアスにいきます。
ではお話を始めると致しましょう。

第肆頁 羽化

ここ麻帆良学園都市という土地は、考え様によっては楽園である。

都市としての能力は全て保持しているし、この都市オリジナル商品もある。

都市外との物価格差は少ないが、それによって外部からやって来る人間も少ない。

国際的なシュミレーションと自主性の育成という名目で、生徒によるある程度の営業すら認められており、学園祭ともなるとその増大する収益によって学祭長者なるものまで現れる始末。

そうなつてくると防犯に対して疑問が湧いてくるところであるが、広域指導員という役目を持った教師らがそれを担っており、昨今の体罰教師らに対する風当たりも何のそのというレベルで厳しく取り締まっている。はつきり言ってしまうと、そこらの警邏より信頼が置ける。

その成果か他の要因があるかは知らないが、この都市には不良らしい不良はおらず、問題生徒といえる者も驚くほど少ない。せいぜい授業をサボる者がいる程度だ。

学園都市というわけであるから幼等部から大学部まで揃っており、

それぞれが個性を伸ばすという特殊なカリキュラムで教育を受けさせている。

尤も、傍目には放置に近いのであるが、それでも生徒らは殆どは文句なく勉強に、クラブ活動にと学園生活を楽しんでいた。

大学部での研究費用も有名大学より自由が利き、特殊研究棟なるものまで存在しており、SFの世界でしかお目にかかれないレベルのロボットが極普通に跳梁跋扈している。

現に中等部ではテストケースとして、人造人間が生徒として通っている。

関節の継ぎ目以外はほぼ人間と同じで、解り難いが感情のようなものまで持っているのだから、大学部の技術の高さが解るという物だ。

しかし、だからこそその矛盾が目立ってくる。

幾ら指導員とはいえ、これだけ大っぴらに生徒に対する体罰が行われているというのに、誰からも問題定義が求められていない事、

中等部の少女がオーナーとなり、飲食店を経営しているというのに感心はされても問題として挙がったりしていない事、

先に述べたように人造人間の少女が登校している訳だが、球体関節に気付く者がおらず、時たま見られる不自然さを完全に見逃している事、

学生の範疇どころか、人間の範疇を超えた身体能力者が多々いるというのに、殆ど気にされる事が無いという不自然さ、

都市外部と、都市内との大きな技術レベルの差異に何故か気付く者がいないという不自然さ、

不信すぎる行動をとる教師と生徒がいるというのに、やはり誰も気にしていない、気付いていないという不自然さ、

そして――

それら全てをひっくり返した矛盾を内に抱えているというのに、破状もせずに安定して都市が運営されている事。

何もかもがおかしく、疑ってかかると幾らでも軋みが見えてくるというのに、自分ら以外は誰も気付けない、気にもならないという気色の悪い現状。

だから彼女はこの学園が、

この街が――

「ん？」

ふと、気付けば隣を歩いていたルームメイトが足を止めてどこを見つめ続けている。

憎々しい…とまでは行かずも、不快そうな眼差し送りつつ。

その目は知っている。

自分がしている目だからだ。

自分がよく周囲まわりに送っているそれだから。

何にそんなに腹を立てているのかと気になり、その視線を辿ってみれば……そこにあるのは馬鹿でかい樹。

この学園都市の名物と言えるそれ。世界樹と呼ばれている巨大樹だ。

何でそんな目で見ているのだろうかと首を捻ったのであるが……

「あ……っつ！！？」

次の瞬間、はっと目を見開いてしまう。

正式名称、『神木・蟠桃』。

絵本でも有名な西遊記に登場する岩猿が、天界で食い荒らした桃の樹の名前だ。

その大きさ高さ、太さは縄文杉すら追従も叶わず、その樹齢も測定不能。

この学園が創立する以前から生えているとの事であるが想像も出ない。

樹高は実に270m。

セコイアが抜かれるほどのふざけた樹高である。

何せ葉の形からして実際に桃の樹なのだ。

つまり、広葉樹であるのにその樹高である。その不自然さも解るというもの。

彼女は気付いてしまった。

そんなギネス間違いなしの樹がすぐ側に生えていたにも拘らず、

自分、は、全、く、気、に、し、て、い、な、か、っ、た、事、に、

一瞬で彼女の顔色が変わった。

真っ青となり、我が身を抱きしめて震えだした。

身体から力が抜け、カクンと膝から崩れ落ちそうになる。

「千雨ちゃん!？」

だが、目敏くそれに気付いた少女は慌てて駆け寄り彼女の身体を抱きしめて支えた。

彼女よりやや小柄な少女であるが、それでもしつかりと力を込め、失いかかった体温を分け与えてやるようにぎゅっと抱きしめる。

「は、はやて……」

「大丈夫。大丈夫や。私がおる。私がおるで？」

そう慰めてやると、少女の胸に顔を埋めたまま、うん、うん、と泣きながら頷く。

この矛盾や不自然の中に埋もれ、足掻いていた日々。

あれだけ関わらないよう生きてきたというのに、

クラスの不条理な奴らから距離を置いてきたというのに、

教師すら信用できないから、会話も流しつつ生活してきたとい

うのに、

それでもまだ、自分らは不条理の中に沈められている実感してしまっただから。

あのクラスにいる限り、

あの教師どもがいる限り、

この学園にいる限り、

この都市にいる限り、

決して自分は逃げる事が出来ないのだと再認識してしまったのだ。

「大丈夫や。いけるで？」

しばらく私の心音だけ聞いとり。

他は何も聞かんでええさかい。

とつとと部屋に戻るさかい、あんなん見んでええから。な？
な？」

「……うん。うん」

幼女のようにぐずりつつもそう返事を返し、少女に寄りかかったまま彼女もようやく足が動き出した。

そんな弱々しい足取りの彼女を痛ましげな目で見、学園の象徴ともいえる世界樹を睨みつけて少女はゆっくりと、ゆっくりと歩き出した。

少女の心の負担を減らすべく、視線や意識が向かないようにしつつ、

周囲の意識を誘導しながら……

少女は間違っている。

完全に間違っている。

ルームメイトを苦しめる世界樹が憎いからと、その世界樹を睨む事によって意識を向けさせてしまったら、

錯乱した彼女の為、当人が苦しむ原因である魔法を使ったり――

愚かにも全く気付かぬまま、本末転倒な救済を行ない続け、それによって結局はルームメイトの首を絞め続けている。

護るという悪善意により彼女と世間の溝は深まり、

少女に対する依存度は上がってゆく。

そして少女に対して依存するという事は、世間に対する溝もまた深まってゆくという事。

その事に気付いていない。

溝の深さによって生ずる事態も、

世間と切り離されるといいう事が、どついつ意味を持っているのか。

それにより自分がどうなったのかも忘れて――

■第肆頁 羽化

チャオメイシェン
超 鈴音――

天才、麻帆良の最強頭脳といった呼び名で知られている本物の才女である。

その才能は多岐にわたり、中等部に入って直に数々のシステムやプログラムを開発、発表し、様々な特許まで取っており、ロボット工学や遺伝子学といった学術は元より、何とお料理研究部でもその腕を知られているし、中国武術研究部でも部長と並び馳せる腕前を知られているのだから、感心すればよいのやら呆れば良いのやら。

特に知られているのはお料理研の部活営業店舗のオーナーである事だろう。

その人気ぶりは凄まじく、学生や教師もそこそこ懐が暖かければまず買いに行くといった有様で、学園祭ともなると麻帆良内外から

人が押し寄せ、朝に昼夜に美味しい料理を求めて人が押し寄せてくるほどの人気店である。

しかし、

真に有名なのは技術屋の方での話で、特にロボット工学における技術の高さは世界一といったレベルを保持している。

何しろ――

「それで、他に変わったコトは無かた力？」

「ハイ。何時も通りに買い物を済ませると真っ直ぐ寮に帰り、部屋に籠られました。」

報告したように、途中 長谷川さんが体調を崩されましたので速度は落ちましたが、直帰しております」

自立型のアンドロイド技術を完成させており、果てし無く人に近い感情プログラムまでも搭載させているのだから。

無論、無意味に行っている研究ではないし、語り尽くせない事情もある。

あらゆる意味で公にできない発明も多々あるのだ。

感情プログラムにしても、下手に世に出せば人道的な意味でも問題を広げてしまうだろう。

そういった危険物まで使い、彼女はある人物を追っていた。

追うも何も同級生であるし、同じクラスで同じ寮なので接触する方法はいくらでもあるだろう。

だが、あえて彼女は直接の接触は避けてずっと一人の少女を調べ続けていた。

「素性もしっかりしていて、過去も洗われている……」

学園側も調査し終えていて怪しいところなんか一つもない。

いや——？」

誰一人として気付いていない。気付けない。

こんな少女はこの時代いなかった事に。

同姓同名の者はいただろうが、少なくともこの時期のこの地には存在していなかった。

と言っても、過去を捏造した訳ではない。その痕跡もない。

転校前の人々の記憶にもしつかりと残っているし、生まれた病院にもカルテが残っている。

調査深度をあげると先祖まで遡^{さかのぼ}れて、どんな素性だったのかも何をしていたのかも大体解った。

が、だからこそおかしいのだ。

誰も気付けない事も、誰も解らない事も、
そして自分だけが気付けてしまう事も……

「一体、彼女は何者なのかね？」

何かをやったにしては大掛り過ぎるし、誰にも接触せずにいるから手も打てないヨ」

彼女が手にしている調査書にある少女の写真。

家族を失って関西から越してきた一人の少女。

身元保証人が何故か自分らの担任であるが、そこに意図は感じられないし……

しかしそれでも怪しい。怪し過ぎる。

その少女、クラスメイトのその少女は――

ある日突然、この地に過去ごと出現したのだから。

エヴァンジェリンⅡ アタナシオティ AⅡ KⅡ マクダウェル。

麻帆良学園中等部に通う留学生であるが、その正体は不老不死の吸血鬼であり、伝説の魔法使い。

嘗ては最強の悪の魔法使いとして、裏の世界では恐怖の対象であった。

そんな彼女が何故こんな土地におり、且つ中学生として学校に通っているのかというと、カモフラージュの為……という訳ではなく、呪いによって大半の力を封じられ学校に通わねばならない身体にされているからだ。

三年ほどで解呪してくれるという約束があつた事もあり、最初の頃こそ人としての生活を楽しんでいた彼女であるが、三回、四回と中学生をやらせられ続けると流石に嫌になってくる。

いや、正確に言えば絶望が膨らんでくると言っただ方が良いだろう。何しろ元々は世界を股にかけた魔法使い。広いとはいえ狭い日本の一地方に十余年も封じられれば見て楽しめる場所も無くなる。

そして、如何なる理由があつても信じかけた相手に裏切られたのであるから失望や絶望は大きい。

だから彼女は、一日一日をただ流されるように過ごしていた。

「ふん……」

何度目かの同級生達が起す喧騒を流し、エヴァは一人家路についていた。

超一流の魔法使いである彼女には従者もいるのだが、人造の人間であるのでメンテナンスが必要という理由から、本日は創造主の下に赴いている。

よって下校は一人。

数百年もの間 一人旅をしていた彼女であるが、不思議なもので強引に腰を落着かされている今では従者がいないだけで妙に寂しさがある。無論、口に出したりはしないのだが。

昔はそれなりに気の合った同級生らがいなくてもなかったのだが、

卒業されてしまえば皆は単なるOGとなってしまうって縁が切れてしまう。記憶にも残らないのだ。

不思議なもので集合写真にも残っていないし、仮に残ったものがあっても誰だったか思い出してもらえず、また気にもならないらしい。

無論、魔法の秘匿という面からいえば当然の処置であるし、当然の効果であろうが、毎回毎回リセットされる側からすれば堪ったものではない。

檻……いや、独房か？

不老不死である彼女にとって、無意味に繰り返させられる日々はそれ以外の何物でもない。

例え瞬きの間でも友人知人のようなモノが出来てから忘れられてしまう事を繰り返すのだから性質が悪いにも程がある。

今の心の支えはこの地に縛り付けた者の血を持つ者。
その死んでしまった魔法使いに息子がいるという事。

そしてその子供がこの地で修行を行なう可能性があるという事だ。

違ったとしてもこの地にやってくる可能性は高く、どうにかしてその血を手にする事ができれば、それを触媒にして呪いを解く事ができるかもしれない。

この地に縫い付けられた不自由さから開放されるかもしれない。

それだけを支えにして生きていたのである。

親に似たのか似ていないのか、幸いにもその息子とやらは優秀で、飛び級で魔法学校を卒業し、その卒業課題として日本にやって来るという。

色々ややこしい裏の事情が見え隠れするが、要は想像していたよりもずっと早くチャンスが廻った来たという事だ。

そういった事もあり、ここ最近彼女の機嫌は結構良くなってきていた。

何せ初めて“希望”というものを感じているのだから。

呪いによって封じられるという絶望を味わっているからこそ、自由になれるかもしれないという希望を感じられているのも皮肉な話であるが。

そんな彼女であるが、どういう訳か今は冷めた眼で家路についている。

別に件の子供の修業の地が変わった…という訳でもないし、その血を持ってしてもこの封印は解けないかもしれない、という可能性が出た訳でもない。

誰ぞに何ぞを言われたのでもない。

「……」

唐突にその足がピタリと止まり、不快そうに唇を歪めるエヴァ。

何とも嫌そうな顔のまま、軽く腕を振ると脇の茂みがパンッと爆ぜる音を立てる。

次の瞬間、

悲鳴のような甲高い声を上げて小さな影がその茂みから飛び出してきて彼女に飛び掛って来た。

「やはりお前か……」

が、彼女はその方向に眼差しを送る程度。防御体勢にも入っていない。

何の余裕があるのか知らないが、明らかな殺気を持って迫ってくるというのにも拘らず、だ。

その視線の先、

まるで縫い止められるかのように空中で止まっているそれ。

狂気の色に目を染め、エヴァに喰い付かんと悶え苦しんでいる猿。

その体軀こそ、よく知られている二ホンザル程度なのであるが様々なものが普通から逸脱している。

まず“牙”が長い。

上顎と下顎から突き出ているそれは、明らかに生物として間違っているほど長いのだ。

目は赤く、それも紅というよりも血の色を思わせるもの。そして体毛もまた、血の色をしていた。

「これで二匹目か。
面倒な……」

手指をくいつと曲げると、まるで見えない糸を巻かれているかのように空に縫いとめられている猿の身体に段が生まれる。

そのまま骨肉を断たんと獣ケタモノの身にギリギリと沈んで行く。

死ぬと言う事が解るのだろう、猿がギーッとエヴァに向けて啼き続けた。

彼女に止める気が無いと解っていても——だ。

ぶつっと硬い皮が切れる音がし、生物の命の色である赤い血が出

ると思いきや、出てきたのはどす黒い液体。

今まで見えていなかった、猿の身体に巻きついていいる糸が見えてしまっほど、ありえない粘度と黒さ。それがこの猿の血の色だった。

猿は最後の最後まで、

今生の際まで嘶き続ける。

エヴァを睨みつけ、怨み、憎しみ、絶対の殺意を持って。

だが、当の彼女はそんな感情を叩きつけられる事は初めてではない。
い。

確かに獣としてはありえない殺意と憎悪であるが、流せない訳ではないのだから。

やや感心するように片眉を上げはしたが、それだけだ。

エヴァは無言でクンッと手首を曲げた。

同時に空にいた猿の身が枝葉をへし折るような音を立てて引き裂かれ、バラバラと血に転がった。

最後まで悲鳴もなく、痛みの鳴き声も上げず、

ただ憎しみと怒りだけをぶち巻いて。

「……ほう？」

彼女はそんな死骸に対し、感心するような声を漏らした。

地面に落ちた首が、最後の力で持って僅かにエヴァを嚙もつとしたからだ。

無論、転がり切れず近寄る事も叶わなかったのであるが、それでもその執念は大したものである。

と――

僅かの間を置き、じゅうじゅうと泡を吹き、バラバラの肉塊が溶け始めた。

今日はまだ二匹目であるが、この猿どもは死ぬと必ずこうやって溶けてゆくのである。

「やれやれ 帰ったらまず湯浴みだな。
香水も無料ではないんだがなあ……」

それも、凶悪な腐臭を残して。

一週間ほど前から出るようになったこの猿。

こんな死に様を見るまでもなく、けっして普通の猿ではない。

行動は凶暴の一言で、厄介な事に人間に対しての殺意と害意を持ち、憎しみや怒りをもって襲い掛かってくるのだ。

なりは小さいが魔法使い達が知るとんな魔物よりも凶暴で、どんな悪魔よりも邪気を放っており、

学園長は元より、数百年を生きたエヴァですら見た事も聞いた事もない邪悪で凶暴なモノであった。

不思議な事に、その憎悪の対象は人間のみ…それも魔法関係者だけに注がれており、一般人や犬猫等への被害は皆無。

牙や爪の禍々しさからして、あらゆるものを怨んでいそうなのに、そこらの草木すら荒らされた形跡が無い。

人間。魔法使い達だけを怨み憎む魔物。

それが今、麻帆良の魔法使い達の頭を痛めているのである。

そして——その存在が現れだした区域。

別段変わったところは見えないものの、世界樹を中心に据えた場合“鬼門”に当たる方位になってしまうその場こそ、

方位が方位の為、それなりの実力者が回っているのであるが、何故かは知らないがある実力者が回った次の日から出現数が増えるのである。

大半の者…学園長を含めた大半の者は“まさか”という思いがあつてか、疑惑の『ぎ』の字も聞こえてこないものであるがエヴァは違う。

のほほんと授業を行なっていた彼に対し、HR後 当人にズバリその不手際さを問い掛けたのだ。

すると彼は……

「そんな事を言われても困るよ。

知つての通り僕は魔法が使えないんだよ？ だから僕じゃない誰かに言ってもらわないと……

怪しいものでもあつたら見つけれられるかもしれないけど、皆何も無いって言うてるじゃないか。

それにゲートくらいあるかもしれないけど、見つける事が出来ても僕じゃあ何もできないよ。

あ、瀬流彦先生はどうか？ 結界とか障壁や術式は彼の方が詳しいはずだよ？」

等とほざいたのである。

自分は何も出来ないから、何もしない。だから自分から動くつもりは無いので、他の担当に言ってくれという責任のたらい回しを行なっているのだ。

更には歳若い者にその仕事を押し付けようとしている。

確かに、言っている事に間違いはなからうが、自分から問題の解決に動く気はなく、無自覚かもしれないが面倒だから他の者に任せるという気持ちが見え隠れしていたのである。

自分だって向き不向きは解るし、同じ状況なら他者に任せたかもしれない。

結果的に回復魔法以外は何とかなる自分にも鉢が回ってきて、警備の仕事が増えて面倒だとも思っている。

——しかし、彼が言うてはいけなだろう。

己の至らなさを嘆き、彼女が持つ別荘の中で死に物狂いの鍛練を行っていた彼はどこへ行つたのだ。

力を得たならそれで良いというのか？

バカモノどもの組織に組していながら、ある意味ふてぶてしさを感ずるほど凶太く立ち回り、不条理と戦っていたのは何だったのか？

本国の官僚の様に腑抜けてしまった彼を思い、強く齒を噛み締めるエヴァ。

軽い悲しさ、憎さ、悔しさや怒り、様々な苦味の感情に満ちていた。

不本意とはいえ知人である男が、それなりに認めていた者が、

その心や性根が腐ってゆくを感じ取ってしまった事が、
襲い掛かる魔物より何より、彼女を苛さいなんでいるのだ。

それ故の“落胆”なのである。

エヴァは二匹目を屠った事を学園長に念話で伝え、そのまま家路に着こうとした。

実際、この殺戮とて火の粉を払ったに過ぎないのであるし、報告義務も無いのだ。

それでも学園長に念話を送ったのは彼女の律儀さからであったのだが……

家へと踏み出した一歩から足が前に進まない。

と言うより、学園から遠ざかりかねている。

何の義理もない訳であるし、自分を封じているのはこの学園だ。

そして非は魔法教師どもにあるのだし、実力者という御墨付きが

犯した不手際はいうまでもない。

だからそのまま帰ったとしても彼女が罪に問われる事もない——のであるが……

猿の残した腐臭を、風が拭い去る。

その風は背後…学園の方から吹いてきたもので普段なら然程気にするようなものでもない。

自然現象としても珍しいものではないのだから。

しかし、どういう事なのだろうか？

腐臭は拭い去られたのであるが、あの臭いよりもその風が不快なのは。

気の所為でも何でもなく、その風を浴びている方が怖気が増してゆく。

猿の腐臭の方がマシだったと感じてしまう程のこの不快感は何なのだ？

「ち…っ」

彼女は小さく舌を打ち、踵を返して普段からは考えられないほど

の早足で戻ってゆく。

魔力や力は封じられて一般人。いやそれどころか年齢相応の無力な少女程度。

簡単な魔法すら触媒に頼らざるを得ない有様だ。

体捌きや操糸術は達人クラスなのであるが、先程の猿程度なら兎も角、それなり以上の怪異には余り期待はかけられまい。

おまけに頼りになる従者すらない。

それでも――

「クソッ 何だこの気色の悪さは？」

それでも行かざるを得ない。

それがどこで起こるのか、何が起こるのかさえも理解できていない。

ただ人としてのそれではなく、彼女の中の人ではない部分が漠然としたそれを警鐘として鳴らし続けているのだ。

何時しか早足は駆け足となり、焦りすら浮かべて人影の絶えた通りを突き進んでゆく。

数百年もの間 恐怖の対象として生きてきた彼女は今、予感に身体を突き動かされて学園に駆け戻っていた。

何もかもを失ってしまいそうな不安感を身に抱えて……

「やれやれ……」

学園長室から出て直、高畑はそう肩を竦めた。

出張から帰って直、警備時間の変更等を伝えられた上でしっかりと見回ってくれと釘を刺されたのだ。

まるで手を抜くなと言われたみたいだなあ……と頭を掻く彼であるが、実際に遠まわしではあるが近衛はそう言っていたのである。

目の余るほどではないものの、エヴァと同じくらい学園長も彼の状況対応が気になっていた。

手を抜くとか、サボるとかではなく、気持ちが腑抜けている。

高畑は、その事を遠まわしに注意されたのだ。

「……と言われてもなあ……」

僕に何をどうしてほしいのやら」

喫煙者には肩身が狭い世の中であるし、何より中等部校舎内であるのだが、緊張から開放されたからか胸ポケットから小箱を取り出して一本抜いて口に咥える。

値上がりに伴って銘柄を安い物に変えたし、何よりタールが少ないものにしたというのに面倒な話だ。

——煙を肺に満たして吐く。それだけの事なのに何で癖になるほど美味しいのだろう。

等と どうでも良い事を考えながら廊下を歩いてゆく。

どうせ何を言っただって警備の時間や範囲は変えられるのだから諦めて受け入れりゃ良いのだ。その方が楽であるし。

尤も、彼の能力は前衛には適しているのだが、調査は不得意。だから仮に異常を発見したとしても報告するだけで良いだろうからそんなに面倒さは無いはずだ。

それでも心労を顔に浮かべているのはどういう理由があると言っのか。

途中まで吸った紙巻を、窓を開けて吸い飽きたように捨てる。

吸いなれたものではないからか、最後まで吸い切れないのだ。

それでも口寂しいからかまた一本取り出して口に咥える。

結局、階段にたどり着くまでの間に三本捨てる事となってしまう。

それこそ、何故安物の紙巻にしたのか解らないほど勿体無い吸い方だ。

階段を下りて外に出、人影が少なくなってきた校庭をぼんやりと見回す。

やはり途中まで吸った煙草を下に捨てて踏み消しながら。

恩人の息子が目出度く卒業出来たからかもしれない。

その少年がこの地で修業する事になったからかもしれない。

或いは麻帆良^{マホウ}で教師をする事になり、自分と交代する事になったからか、

それともこの地の平和さに慣れきってしまったからか、

高畑は平和さに浸りきり、それを崩さないように、崩されたくないように思い出していた。

だからこそ、このあまり起伏の無い生活をずっと護りたいと――

「……そう、だったっけ？」

何か忘れている気がする。

何か大切な事を忘れている気がする。

大切な何かを忘れているからこそ、生き甲斐を感じられず、維持という現状に固執している……のではないのか？

その為に生きてきたのではないか？

そう心の奥から疑問が湧いてくるのだが、直にどろりと蕩けてしまっ
まう。

溶けて崩れて跡形もなくなってしまっ

だからこそ億劫になり、気を高める事も出来ないのであるが……

「まあ、いいか」

と、彼は直に吹っ切り、廊下をのらりくらりと歩いていった。

しかし、それが正しいのかいけない事なのかははっきりと断言できないまま。

本人は気付いていないようであるが、難題は全て先送りにしたまま。

色々としこりを抱えたまま、吹っ切ったつもりになって……

——いや？ 吹っ切らされた、というのが正しいのかもしれない。

下手なジェンガより不安定な状況をほったらかしにして彼は仕事に戻ってゆく。

本来の彼であれば違っていたであろうのに——

気持ち悪い——と思い始めたら限が無いもので、ストレスばかりが溜まり続けてしまう。

特にこの中等部校舎は色んな矛盾を内に抱えている為に得体の知れなさが半端ではなく、中にいる時は然程でもないのであるが、一步外に出て校舎を見てしまうと怖気すら浮かんでくる有様である。

お陰で登校前は登校拒否で、下校時には下校拒否気味となってしまう。

「はぁ……」

溜息を漏らしつつ振り返って校舎を見上げる。

広い事は広いがそんなに高い訳でもない中等部校舎。

夕暮れ時の陽に染まったそれを見ていると、断崖絶壁を見上げている気分になってきてしまう。

おまけに赤い夕日の所為で臓腑の様に感じて吐き気すら催して来るのだから最悪である。

口元を押さえて深呼吸。

すっぱいものが駆け上がってきかかったが、何とか耐えてぐっと飲み込む事に成功した。

息は乱れたが、見るのを止めればよい事を今更気がついて目を逸らして息を整える。

『何や 悪阻^{つわり}か？

……って、誰の子や！？ 私というオンナがおりながらーつつ
！！』

以前そうやってルームメイトにからかわれた事を思い出し、口元に笑みが浮かび気分的にかなりマシになった。

前にこうなつた時も彼女が気を紛らわせてくれたのである。

——まったく…いつも世話になりっぱなしだなあ……

このままじゃあヒッキー一直線だぜ。

とは思っただが、この都市の歪さに気付いてしまったのだからどうしようもない。

流石にこれ以上両親に迷惑を掛ける気は無いので今は大人しくしているつもりであるが、高校を出たらこんなとち狂った街なんかとつとと出て行くつもりだ。

その前に自分が潰れなければ良いのであるが……

「やあ、千雨君。どうかしたのかい？」

ぐ……と吐き気がぶり返してきた。

どうしてこんな時に話しかけてきやがるのか。

泣きつ面に蜂と言うか、最悪のタイミングで彼女……長谷川 千
雨に話しかけてきたのは、こんなおぞましい学園で、歪ささの直中^{ただなか}
で歪み切った教師を行なっている気色の悪い存在――

認めたくないが自分の担任である男、

高畑 〃 〃 タカミチというクリーチャー^{クリーチャー}だった。

「いえ別に……」

クラスメイトと待ち合わせをしているだけです」

問い掛けに対して千雨の返す言葉は素っ気無い。

いや、素っ気無いというよりは突き放している。

何しろ関わって欲しくないのだから。

「そうかい。」

ああ、はやて君か。キミ達は仲が良いみたいだからね」

「ええ……」

何時にない馴れ馴れしさで話しかけてくる担任に、苦々しく答える。

普段ならそれなりに空気を読んで距離を測っていた彼であるのに、今回はどういふ訳か逆に歩み寄ってくるではないか。

千雨の感覚で言えば“にじり寄って来る”であろうが。

「だけど大丈夫かい？ もうすぐ陽が暮れるよ。
早く帰った方が良い」

「そう、ですね」

近い。

顔を向けていないからはつきりとは言えないが、その距離は一メートルと無いだろう。

何でこんな時に限って近寄ってくるのか、運廻りの悪さに泣きたくなる。

心の中ではずっと はやてが来ない事を愚痴っていたのであるが、何時しかそれは助けを求める悲鳴となっていた。

それほど嫌なのである。コイツこいつという事が。

「おや？ 何故こちらを向いてくれないんだい？
何か問題でもあるのかな？」

しかし現実は無情だ。

普段よりずっと、そして考えられないくらい馴れ馴れしく話しかけてくる。

おぞましき云々以前に、生理的な嫌悪感が湧き上がり、怖気によって肌が粟立ってきた。

胃袋がぎゅっと握られたような感触がし、内容物が食道を逆流し
てきそうだ。

「ははは…」

嫌われたものだね」

嫌い？

ふざけるな！ お前らが気色悪いだけだ！！

ヘドロの臭気と感触の中で平然としている方がおかしいんだろ
うが！！

千雨はそう頭の中で叫ぶ。

気持ちには完全に拒絶しているのに、それなりに態度で示している
のに、嫌いなどと言ったレベルで対応してきやがる。

色々と積み重なったストレスで意識が飛びそうだ。

しかし、それでも動けなかった。

これ以上聞きたいないし、それほど嫌ならば走って逃げる事も出
来た筈だ。

少なくとも普段の彼女であれば、例え教師が相手でもやらかしてしまう事である。

しかし何故だろう。足に根が生えたかのように動けない。

距離を置きたいのに身が引かれる感触もある。

蜘蛛に糸を手繰り寄せられているような感覚。

死というか、破滅に引き込まれつつある“恐怖”が溢れ出てくるようだ。

「ははは…

はは、ははははははは………」

笑うな!!

ついに泣きながらそう叫ぶが声にならない。

声は出しているのだが、音に変化していない。

「はは、ははは、ははははは……」

あはははは、アは、あハ、アハハハ………」

音のトーンはどんどん上がり、耳障りどころの騒ぎではなくなつた。

怖気や恐怖を突破し、千雨の心には殺意と憎悪が湧く。

そして真っ赤で真っ黒なその感情に心が満たされてゆく。

「大変だね、君モさ。

周りがオカシイと解ッてしまうから近寄れない。

自分が別だト理解できていルからこそ、異物だとバレるのが怖いから行けなイノかな？

馴染めない、馴染もウトしないのはジブンが別物だッて解ッテルかラダろう？」

その言葉が聞こえた瞬間、音を立てて二色の色、二色に感情が碎けた。

激情も湧いた。

感情が煮え滾り、爆発もした。

だが人は凶星を刺されると頭の中が真っ白になってしまう。

その隙を作られてしまったのである。

真っ白になった意識の奥が見えてしまうほどの間を生みだされてしまったのだ。

心の奥の奥で千雨はようやく気がついた。

話しかけられた時に気付かねばならなかった事を。

苦手意識があったから、奴の顔を見ないでいた時に既に嵌^{はま}っていた事を。

——そうかコイツは……いや、コレは……

操り人形の様に力無く顔を向けさせられた千雨は見た。

気がつくのが遅すぎた事であるが、初めからコレの狙いは自分にあった事を再認識させられた。

意識が白くなった間隙を狙われ、そこにナニかが雪崩れ込んだとき、僅かに残った自分がようやく理解した。

全ては遅きに遅し。

カードを裏返すように別になり、完全に札が伏せられる瞬間にそれを知っても意味は無いのだ。

例えどんなに必要な事であったとしても、

——コレは高畑じゃ……

そんな事実や現実を知ったとしても。

第肆頁 羽化（後書き）

ご閲覧、お疲れ様です。

テーブルトークでダメージを受けた分、打つのが遅くなってしまったという不幸。

それでも傷も癒えつつありますのでどうにか上がりました。

ヒロインは はやてですが、サブに千雨とエヴァがいたりします。と言っても、所謂ハーレムっぽいモンじゃなく『一味』という意味ですが。

悪意なく迷惑ふりまき、みんなで不幸になって行く事でしょう。当人たちは楽しいでしょうけど。

という訳で次からバトルです。

はよ主人公出さにや……

ではまた……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0519w/>

魔法封絶 マギステル

2011年11月13日10時30分発行